

軍医は、「一中隊があぶない」との報告を聞くと、すぐに小倉勝也軍医少尉（芦屋市出身、故人）山崎仁衛生准尉（熊野市出身）とともにかけつけた。道のりにして五、六百メートルもあつただろうか。どの戦闘でも同じだが、第一線はさんたんたる光景だ。付近一帯は石のごろごろした草地。戦死者の肉塊が散乱しそこここに重傷者がうめき声をあげている。迫撃砲弾はなおも執ように飛んでくる。中隊付の衛生兵島田藤男一等兵が機敏にかげずり回っている。当時の戦時編成では大隊付の軍医が二人と衛生准尉、中隊ごとに衛生兵二人が配備されていた。到着した渡辺軍医らは、砲弾を避けながら負傷者の応急手当をして回る。傷ついた兵の腕をしばって止血したり、ある程度の傷ならショウコウガーゼに赤チンを含ませて包帯を巻くだけ、すぐ後方の野戦病院に送る。

重傷者が胸のポケットから家族の写真を取り出してくれと目で訴える。山崎准尉が彼のポケットを探って出してやる。その重傷兵は妻と子の写真をじつと見つめ、うなずいて死んでいった。この間にも敵砲弾はたえまなく付近にサク裂する。ついに迫撃砲の一弾は、負傷兵の手当ての返り血で両腕を鮮血に染めて活躍する島田衛生兵の鉄カブトに命中した。渡



麒麟門付近のトーチカ陣

辺軍医でさえ思わず顔をそむけた。むざんな戦死だった。片手にハサミと包帯を握ったまま……。島田衛生兵の話は当時の「新愛知」新聞でも紹介されている。

敵の猛砲撃は一時間近く続いたあげくやんだ。本道をうずめた敵も退却し、わが方の視界から消えていた。一大隊は湯水鎮を占領したのだった。

渡辺さんは昭和十二年八月に召集され、十四年夏の内地移駐まで連隊に属した。十七年一月に再び召集され、京都の中部第四十部隊野戦高射砲第四十一大隊の軍医で、同九月ラバウルに上陸、ムンダ岬の戦闘を経て十九年ラバウルに転進。(大尉) 同地で終戦、二十一年四月復員した。

支那事变当時三大隊の軍医には桑名市の安藤元さん(安藤医院)がいた。渡辺さんは当時の思い出を次のように語っている。

「野戦は初めての経験で、上陸後一週間は便通がありませんでしたよ。軍医は馬一頭と自転車をもらったが、自転車は上陸後三日目に壊れて使えなくなつた。当時は医薬品の補給も割り合い順調だったが、やはり戦場で傷ついた兵ははじめでした。いろいろな体験をしたが、激しい戦闘が続くと、兵たちは少しの負傷でも後送されたがっていましたよ」

(五) 裸で泳ぎ敵舟奪取

——紙島
一等兵——

肌刺す寒さ物ともせず——

寒中、裸で敵前渡河

昭和十二年十一月十四日から十五日にかけて支塘鎮の敵を撃退、連隊の左縦隊となった第三大隊（大隊長上田孝少佐）に配属された第三機関銃中隊は、常熟―無錫―丹陽―湯水鎮と本隊の左二^キを前進した。南京攻撃までに馬が間に合わず馬なしで道なき道を前進、重機は分解、重い弾薬箱は一人ずつかついで進む。おまけにクリークに阻まれて進撃するのだから並たいていではなかった。ひとつすべったら一人では起きあがれない始末である。

敵は、このクリークにかけられた橋という橋はみな破壊している。そしてその対岸には陣地を構築し、どこの場合も頑強に抵抗するのであった。名称は忘れたが、幅百^{メートル}ぐらいの大きなクリークにぶつかって、大隊の前進が全面的に阻止された。わが第三機関銃中隊がその位置に到達したとき、どうしてここを渡河するか鳩首謀議した。



山本芳一さん

敵は対岸の竹藪を利用してえん（掩）兵壕を築き、盛んに射ってくる。肉弾で突撃するにも橋がない、舟がない、という状態。このとき敵陣下に舟が一隻浮かんでいるのを発見したのは、同隊に配備されていた乙部一准尉（現津市選出県議乙部一巳氏の実父）で、「あの舟を奪ってくるものはないか」と叫んだ。そのとき、

「私をやって下さい、私が行きます」

と叫ぶやいなや、裸になってクリークに飛び込んだのは

紙島一等兵（紀勢町錦出身）であつた。十二月の中支江南は日本の一月の氣候、真冬の季節、肌刺す寒さである。紙島さんはなにしろ太平洋の荒波を友として育つたのだからその手練の水泳は見事なもの。『アレヨ、アレヨ』と戦友たちが感激して見つめるなかを勇敢に泳ぎきり、舟を奪取してふたたび泳ぎ帰つたのだつた。そしてこんどは井原隊（第三機関銃中隊）の決死隊を乗船させ、またも悠々と舟をこいで敵陣へ渡した。そのおかげで決死隊は後方の援護とともに前面の頑強な敵を見事に撃破、遂に凱歌を奏したのであつた。

この戦闘における分
隊長は志摩郡志摩町和
具の山本芳一伍長、小

弾丸雨飛の中に・

敵舟を奪ふ

白衣の菅野大尉が齎した

紙島一等兵の武功



セザクリックに於いて、（註）敵舟に泳ぎ渡り敵舟を奪取し、部隊を渡河せしめた決死の士にもたらされた——この殊勲の勇士は北牟婁郡錦町出身、野田部隊紙島山一等兵で、大佐野田大尉によりはじめて明らかになったもので、囃もれてゐた同君の殊勲物語はか

紙島一等兵と、その武功を伝える当時の新聞記事

隊長は久居市新町の堤千里少尉（八十五歳で健在）であつた。紙島一等兵の勇敢な行為は全員を涙の出るほど感激させたが、これと緊密な連携をとつて必死の援護射撃を指揮した山本芳一伍長も偉かつた。もちろん堤少尉の指導力も拔群である。そのため紙島一等兵には功七級金鷄勲章、山本芳一伍長には功六級の金鷄勲章がそれぞれ下賜されている。もちろん、数々の武功を重ねた堤少尉には功五級が下賜された。

その当時、この物語は戦場の花で、新聞にも花々しく書かれ、故郷に伝えられた。無事、南京攻略戦（紫金山攻撃）を終え、山西、大別山、漢口、北支と大陸を転戦、昭和十五年凱旋、紙島一等兵も山本芳一伍長も堤千里少尉も健在である。

第十一章 南京攻防戦の概観

戦争であるから敵味方に戦死傷はある。これは如何に美辞麗句を用いようともぬぐうことのできないことである。南京城の攻防戦は熾（し）烈を極めた。中国軍もその首都である面目をかけた堅固な陣地に拠り徹底抗戦、実に見事な勇敢な防戦をしたことは称（たた）えられることである。そのため、わが軍の悪戦苦闘は筆舌に尽し難いことであつた。この大攻防戦のあと、まぼろしの虐殺があつたと巷間に喧伝されるから、この蒙（もう）を正すことが使命であると心得、真実を知る者を探し求めた。前田雄二さん（後述）が、もっとも具体的に語つてくださったが、一人や二人の証言では実証が出来ないことであるから、この戦闘に参加されたすべての人にお尋ねして行きたい。そのようなことはなかった、見たことも、聞いたこともない、とは、これまでお会いしたすべての人からの言葉である。

こうした不幸な戦争を、なぜ行つたか。今それを問うてみたところで元に戻るものではないが、どのようにして戦いが行われたかは、生き証人が何十、何百、何千人もいる。このことを求めていこうとしていく。

以下、初めてお読みいただく人も、戦争を知らない世代の人にもわかりやすいようにこの攻防戦に至るまでと、その概観を説明させていただくことにする。

(一) 南京大包围、着々と

第一線の
第一大隊 指令後4日間で進軍

十一月二十日、大陸南北における戦線の拡大に伴い、陸軍最高統帥の府として大本営が設置され、いよいよ対支作戦に腰を据えて取り組むことになった。

そして十二月一日、大本営はかねてからの現地軍の要望をいれ、松井軍司令官に対して南京攻撃を指令し、同指令官はただちに要旨次のような命令を隷下諸隊に下達して、万全の措置をとらせた。

(1) 方面軍ハ直チニ南京ヲ攻略セントス。

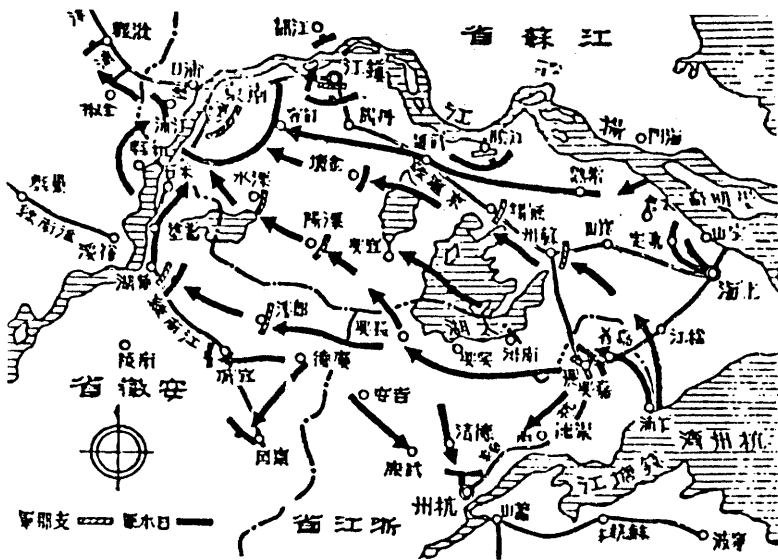
(2) 上海派遣軍ハ五日頃行動ヲ起シ、磨盤山系西側地区ニ進出スベシ。一部ヲモツテ揚子江左岸地区ヨリ津浦鉄道ヲ遮断スベシ。

(3) 第十軍ハ十二月三日頃行動ヲ開始シ、溧水オヨビ蕪湖ニ進出スベシ。

各部隊は、敵首都攻略というこの命令に接して勇躍した。すでに第一線部隊は、上海から敗退した敵を随所に撃破し、南京への道を急いでいた。その勢いは、まさに疾風枯葉を卷くの感があり、呉福陣地の攻略に引き続き、無錫―江陰を結ぶ堅陣に殺到、常熟、無錫を陥れた第十六師団は、蘇州を屠って西北上してきた友軍とクツワを並べて京滬鉄道に沿い、進撃した。また揚子江沿いに作戦した兵団は、南京への水路の関門ともいふべき江陰砲台を陥れ、鎮江砲台に迫っていた。

一方、杭州湾に上陸した第十軍は、このころ独断で主力を太湖南岸の要衝、湖州西方四十キロの線まで進

無錫に滞在して英氣を養っていた我三十三連隊は二十九日早朝、ふたたび最前線を目ざし行軍を開始した。將兵の胸中は首都南京の攻略に参加できる喜びにあふれ、早くも初冬の色濃い江南の野をひた押しに進んだ。三十日は常州に露営、月を越した十二月三日には丹陽をすぎ、句容に迫った。句容を中心とする南北の丘陵地帯は、南京防衛の外部陣地帯として、かねてからの敵の抵抗を予期していたが、五日片桐（歩兵第九連隊）大野（歩兵第二十連隊）西部隊によって占領された。ただ、その周辺にはまだ残存の敵があったので、



連隊はそれを掃討したが、師団の前衛として六日句容に入城した第一大隊は、句容飛行場北方高地に陣地を築いている敵を攻撃すべしと命令を受けた。

敵は台地上に幅約三百メートルにわたり数線の鉄条網を張りめぐらし、要所に掩蓋銃座を設けており、しかも、その前方にある飛行場の平坦地は、攻者にとつてはことに不利であった。師団砲兵の援護射撃により、午後になってようやくその第一線を奪取したが、敵は第二線陣地により抵抗を続けた。戦況は進展しないうちに日没となり、南京へ急ぐ師団としては、ここで思わぬ妨害にあつたことになる。渡辺第一大隊長は夜襲によつてこの敵を撃滅しようと企画したが、七日午前零時頃になって敵の動揺に乗り、突入してこれを奪取した。

午前八時、追撃に移る。

敵は湯水鎮方向に退却したが、第一大隊は依然師団の前衛として午後二時五十分ごろ、湯水鎮東方約一キロの顔家村に到着した。湯水鎮は南京の東方二十キロにある支那には珍らしい温泉郷で保養地として知られた所であるが、敵はこの部落を中心に、高地を利用して



南京めざし進軍する日本軍将兵

堅固な陣地を構築していた。第一大隊はふたたび同夜、夜襲によってこれを奪取することに決め、翌八日午前三時、白兵戦のすえ撃退、ついでその南側に連らなる陣地も攻略して午後五時三十分、湯水鎮一帯を手中におさめることができた。

翌九日も第一大隊は引き続き師団の左第一戦として本道南側の山地帯を攻撃しながら下麒麟門に進出すべしの命を受け、午前七時三十分出発、残る敵を駆逐して午後五時半同地南端に進出、それまで師団予備として後方を進んできた連隊主力（第二、第三大隊）と交代し、師団予備となった。これで句容以来四日間にあたる第一線の任務を解かれたわけである。

すでに南京は招呼の間、本道上には日本軍の戦車がばく進し、日の丸の旗がひしめいている。揚子江岸の鎮江は八日に陥ち、長駆進出してきた友軍によって南京上流の都市、蕪湖も九日に落城、わが軍の南京大包囲網は刻々、その鉄環を締めつつあった。

（二） 投降勧告も回答なし

—— ついに南京城総攻撃へ ——

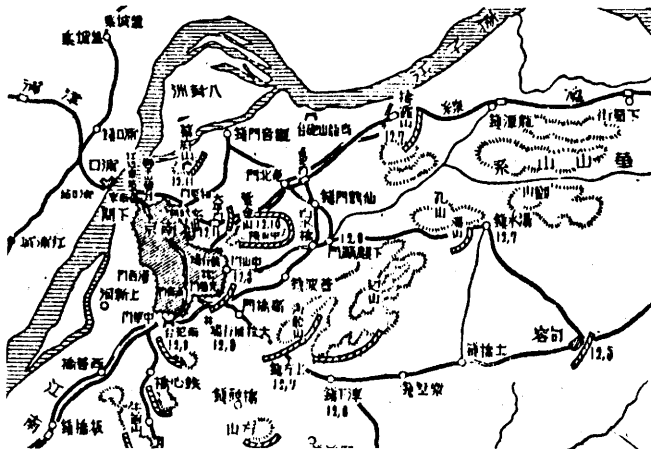
南京は国民政府の所在地であり、領袖・蔣介石はこの地から支那全土に対し、抗日救国の号令を下していた。

支那大陸は広く、その奥地には拠るべき都市も少なくなかったが、北京に代わる新都市として定めた南京は、国際的な港湾として開けた上海を経済の中枢として、政経両面の根幹を形づくってきた近代都市で

あり、蔣介石政權の威容を示すにふさわしい都であつた。

市街を囲む城壁は全長およそ二十キ、高さ二十^リにおよぶ堅固なもので、その外周は天然、人為の障害物を巧みに利用して難攻の備えを持つてゐる。西側は揚子江の岸に近く、河を越して対岸の浦口から北支に通じる鉄道、津浦線に接続し、北方から東方にかけては、城壁の真上にある獅子山の砲台から玄武湖の水を経て、標高八百^リの紫金山第一峰に連なり、東南部から南部にわたる正面には、雨花台を中心とする小丘陵地帯をめぐらし、その城壁真下には揚子江の水を引いて幅百^リ、深さ二^リにおよぶ水濠がある。城内東南隅は飛行場を持てるだけの広さがあり、北方から東回りに把江門、太平門、中山門、光華門、水西門などが交通の関門となつてゐる。これらの城門を閉鎖すれば、南京城は空よりの攻撃以外には、容易に城内に対する戦闘行動ができないのである。

南京を失陥することは国民政府にとって致命的な敗北を意味するが、すでに北支において北京を失い、中支において上海を奪われた支那軍が果たしてわが中支方面軍の氣負いたつた追撃を阻止しうるかどうか、日本国内はもとより世界注視の的であ



南京付近図

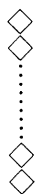
った。

南京防衛のため支那軍は、その城外に三線の陣地帯を構築、十分の兵力を配備したといわれ、その抵抗も頑強であつた。南京城直接の防衛としては、その重点を紫金山を中心とする東側高地帯に指向し、中央直系の精鋭を配置して日本軍との決戦を企図していた。

南京城を攻略する中支那方面軍は、東方と東北方から第十六師団と第十三師団の一部、南方と西方からの第九師団、第一百十四師団、第六師団を主体とする部隊、また第十三師団の主力は揚子江西岸にわたり、津浦線を遮断して浦口西方地区に進出、第十八師団は遠く南方を迂回して揚子江東岸の蕪湖を占領することになっていた。

連隊が下麒麟門に集結した九日の正午、松井（石根）最高司令官は、南京防衛司令官唐生智（とうせいち）に対し「日軍百万スデニ江南ヲ席卷セリ。南京城ハマサニ包圍ノ中ニアリ。戦局大勢ヨリ見レバ今後ノ交戦ハタダ百害アツテ一利ナシ、オモウニ江寧ノ地ハ中国ノ旧都ニテ、民国ノ首都ナリ……」以下、要するにりっぱな都を戦火で灰にし、民衆を殺すのはしのびないという内容の投降勧告文を上空から投下した。

回答は二十四時間以内。明十日正午までに降伏しなければ、南京総攻撃を開始するといふものであつた。将兵は白旗を掲げた軍使が現われるのを願つた。（後述の兵の記録から）しかし回答期限の過ぎた十日正午に至つても何ら音さたなく、かえつて同日早朝から猛砲火を返してきた。ついに同日午後一時、南京総攻撃の火ぶたは切つて落とされた。



話は少し戻って。十日午前一時三十分、わが三十三連隊に紫金山（しきんざん）攻略の命令が下った。つまり中島第十六師団（金沢）が南京城南側まで進出したので、追撃隊（九、二十連隊）をもって本道南側地区から、また三十三連隊（一大隊と五、八中隊欠）によって本道（含まず）以北、紫金山一帯の高地攻略を企てた。師団命令を受けた野田隊長は、直ちに次のような「歩三三作命甲第一二四号」（十日午前一時三十分、於下麒麟門）を下した。

一、第九師団ハ、南京城東南側近ク進出シ、城壁ニ依ル敵ト交戦中ナリ。南京城東北角ノ敵ハ十五^{センチ}砲ヲモツテ九師団ヲ射撃シアリ。南京城攻略ノ端緒ハ師団ノ紫金山進出攻略ニ依ル状況ニアル。師団ハ直前ノ敵ニ追尾シ、スミヤカニ南京城ニ肉迫セントス。右側支隊（注、三十八連隊）ハ主力ヲモツテ玄武湖北側地区ヨリ、一部ヲモツテ紫金山付近ヨリ、追撃ハコレヨリ左翼隊トナリ本道南側地区ヨリ攻撃前進ス。

二、連隊（一、五、八欠）ハ右翼隊トナリ（本道含まズ）攻撃前進セントス。右側支隊トノ戦闘地境ハ五旗——蔣王廟——玄武湖東方五百^メ——南京城東北角ヲ通ズル（線上ハ右ニ含ム）左翼隊トノ戦闘地境、下麒麟門、中山門ヲ通ズル線（線上ハ右ニ含ム）野砲兵第二十二連隊長ハ野砲十二連隊第二大隊ヲ合ワセ指揮シ本道両側地区ヲ前進シ、両翼隊ノ戦闘ニ協力ス。

三、前衛ハ本朝七時〇分下麒麟門西側ヲ出発、獅子墳、郭家具付近ヲ経テ青山付近ニ進出シ攻撃ノ目的ヲモツテ本道以北ノ敵伏地形ヲ搜索スベシ。

（四）爾余ノ諸隊ハ本隊トナリ連隊本部、第九中隊、第十中隊第二大隊（五、八欠）速射砲、連隊砲中隊、

小行李、第二大隊ノ一個小隊ノ順序ヲモツテ、午前七時三十分マデニ下麒麟門三差路ヲ先頭トシ、徒上縦隊（要スレバ道路ノ北側ニ集合シ）爾後ハ前衛ノ後方四百メヲ続行スベシ。

五、余ハ午前七時〇分本部ノ先頭ニアリ。

連隊長 野田大佐

命令受領者を集め、このように「口達筆記」をさせた。

(三) そびえる紫金山

——攻撃目標を第三峰に——

連隊が攻撃を命じられた紫金山は、既述のように、南京城の死命を制する要衝であり、その主峰である第一峰は標高約八百メであるが、南京城壁に近く、高々とそびえる山だけに岩肌を露呈した山容はいかにも南京城東側の守りにふさわしい天然の要塞である。その南側の山ふところには、中国の国父といわれる孫文を葬った中山陵が莊重な姿を見せており、平和な時にはこの陵墓を含めた山ふところ一帯は、南京市民の清遊の地であつた。しかし、この山を中心にいくどか内戦の砲火が交えられたという歴史も残っている。

山の形は、第一峰を中心に馬の背のような稜線が東西に走り、大きな兵力の展開は困難であり、東南端には小さな鞍部を隔てて第三峰と呼ばれる標高二二七・五高地、その両峰の間には三八二・五メの第二峰がそびえている。

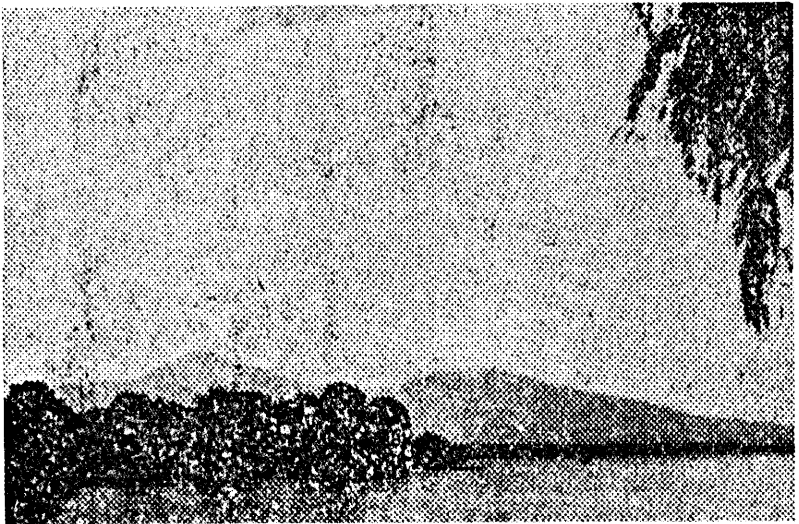
第一峰の西南方には鞍部を越して白亜の天文台が建ち、ここから峰続きに降りると石畳の道が大平門へと続いている。

中山陵のある南側は、松等の樹木におおわれた緩斜面であるが、その中腹からは急斜面になり、稜線の北側は切り立った断崖をなして登はんすら容易でなかった。雑木のまばらに生えた岩山はさえるものがなく攻めにくい。

紫金山の重要性を知る重慶軍は高地の特性を巧みに利用して、ペトン製のトーチカをはじめ、多くの掩蓋銃座を構え、鉄条網をめぐらした数線の散兵壕を設け、これに軍官学校指導総隊約一個旅団を中心とする最精鋭部隊を配し、南京の攻防をこの一戦に賭けていた。

十二月十日午前七時、連隊は第三大隊（二中隊欠）を前衛として下麒麟門を出発した。冬の気配すでに濃く、黙々と行く将兵の肌をさす風は冷たかった。

主力は連隊本部、第九、第十中隊、第二大隊、速射砲



紫金山の遠景

中隊、連隊砲中隊、同小行李、第二大隊の一小隊の順序で前衛に続き、八時三十分黄家庄付近に集結した。野田連隊長は青馬東方高地において紫金山一帯の敵情地形を偵察した結果、攻撃の重点をまず第三峰に向することにした。

紫金山の北面は屏風を立てたように崖続きで攻撃が難しく、南面は緩斜面で攻撃しやすいが、敵もそれに備えて陣地を堅固に構築しており、抵抗も頑強である。しかも中山門に通じる本道方面の戦闘の進捗状況に大きく左右されるので、紫金山奪取が急務であるのを思うにつけ、とるべき最良の手段とはいえなかった。したがって、兵力使用には若干の困難が伴うものの東西に延びる紫金山の稜線伝いに東方から第三、第二、第一峰と奪取してゆくのが最良と判断したからである。

午前九時。連隊長は前衛としてすでに青馬村東北側地区に進出していた第三大隊（第九、第十中隊欠）を左第一線として稜線上に展開、第三峰の攻撃を命じた。当時まだ隣接部隊との連絡がとれず、配属された野砲兵第八中隊も到着していなかったので、連隊砲、速射砲をこの方面に協力させた。

第二大隊を右第一線として、第三大隊に連係して黄馬北側地区に展開、比較的登はん容易とみられる正面から紫金山東北角に向かい攻撃を命じた。また直轄部隊として第九中隊を黄馬南側、つまり第一線両大隊の中間から、同じく紫金山東北角に向かい攻撃させた。それには両大隊の間隙が相当大きいので、その連絡を容易にする意味もふくまれていた。そして、第十中隊を連隊予備として、第三大隊の後方に位置させた。

左第一線の第三大隊上田少佐は、第十一中隊に第三峰正面からの攻撃を命じ、第九中隊はこれに連係

して敵を左翼から包囲するように展開、前進を開始した。

敵は既設陣地を利用して猛烈な砲火を集中しはじめ、紫金山攻防の水ぶたは切って落とされた。中島純雄中尉指揮の速射砲中隊は、下麒麟門から青馬にいたるけわしい山道を、砲二門を分解搬送して第一線に追隨、正確な銃眼射撃をもって敵トーチカを破壊して、第三大隊の攻撃に協力、さらに黃馬付近に陣地を変換して第二大隊、第九中隊の前進をたすけた。安田治大尉指揮の連隊砲中隊も、第三峰の北側鞍部から紫金山第一峰南麓に近く進出、主として第三大隊に協力した。

第三大隊は、これら部隊の協力のもとに逐次第三峰を中腹に向かい前進したが、敵も後方から兵力を増加し、午前十時三十分、遂に彼我の白兵戦となった。第一線の将兵は敵を撃破、紫金山攻略の第一関門ともいべき標高二二七・五高地をわが手におさめた。

右第一線の第二大隊は、同じ時刻ごろ紫金山東北の急斜面を一步一步敵に近づきつつあり、第九中隊は稜線上に進出して第三大隊長の指揮下に入った。

(四) 西に対し攻撃続行

——高地東側の「コブ」を占領——

第三峰から第一峰にいたる地形は、馬のような狭い尾根続きであるので、その攻撃は第二大隊を第一線とし、第三大隊を第二線として西に面して攻撃を続行することにし、第二大隊は午後四時、第二峰高地東側にあるコブを、ついで六時、それに続く第二のコブを占領した。

一方、句容攻撃以来予備として後方にあつた第一大隊（大隊長、渡辺綱彦少佐）は、連隊に復帰を命じられて午後二時ごろ、青馬東北側で連隊長の指揮下に入った。

これに先立って、敵の大部隊が出て、右側支隊の猛攻によつて鎮江—南京道に沿ひ盆路口方面に退却中との通報を受けていた連隊長は、復帰した第一大隊をただちにこの方面に投入、敵を全滅して連隊の右側背を安全にしようと企図し、連隊長自ら第一大隊を率いて上五旗に前進、有力な一部を下五旗北側にだして敵情を偵察したが、すでに敵の影がなかったので、下五旗に一個中隊を残置し、午後七時、その主力を黄馬および青馬北側に集結、夜を徹して攻撃の準備をした。

速やかに第一峰の攻略を企図する連隊長は引き続き第一線部隊に夜間攻撃を続行させたが、戦況の進捗は思うにまかせなかった。

その夜のこと。

野田連隊長は、佐々木師団参謀から「右側支隊の兵力が少ないので、軍司令官宮殿下（朝香宮鳩彦王）にはご懸念あらせられている。だが紫金山の攻略は師団として最も重要視し



観光地になってしまった中山門

ているので、万難を排して奪取しなければならない。いま連隊の状況は、第一大隊と右側支隊に配属可能なりや」との電話をうけた。

連隊の状況は、二個大隊を掌握しているとはいえ、それぞれ何中隊かを欠いており、連隊予備も一個中隊にすぎない。しかし、連隊長は、参謀の意のあるところを察知して「連隊は二個中隊で紫金山を攻略してみせる。第一大隊の配属は異存なし。ただし小銃一個中隊だけを残しておいてもらおう」と決意し、その旨を回答した。連隊長としては、紫金山攻略の兵力に十分とはいえないものの、あえてその一部をさいて軍の使用に供することを承諾したものであり、それだけに異常な決意をもってその後の指揮に当たらねばならなかった。

一方、中支那方面軍は、南京城攻略の鉄環を締めつつあり、第十三師団をもって揚子江を挟んでその兩岸地区より、第十六師団をもって紫金山を中心とする地区、第九師団をもって光華門南方の地区、第三師団の一部および第百十四師団をもって中華門南方地区、第六師団をもって雨花台西方より敵の退路を遮断するようにした。

第十六師団は、右側支隊（歩兵第三十八連隊）の主力をもって、玄武湖北側地区より、一部をもって紫金山北側地区より南京城北側に向い、歩兵第三十三連隊主力をもって紫金山一帯を攻略、歩兵第九連隊をその左に展開して紫金山南側地区を、歩兵第二十連隊をもって最左翼に展開して本道に沿う地区を中山門に向かい、攻撃させた。

軍としては、南京城の攻略は、全軍を統制した上で実施する予定であったが、各部隊の一番乗りの気分

が強く、また攻撃速度にもそれぞれ差があつたため、各方面ごとに各個の攻撃を実施するようなかたちとなつてしまつた。

最も早く進出した第九師団の左翼隊である歩兵第三十六連隊（脇坂部隊）のごときは、九日すでに光華門前に殺到し、十日には伊藤善光少佐の指揮する突撃隊が高さ二十呎の城壁を乗り越こえて、城門の一部を占領した。

十日正午、南京城をめぐる日支両軍の交戦は激烈の度を加え、銃声が天地をゆるがし続けた。その夜十時、師団命令により、連隊は紫金山第一峰を奪取し、太平門、富貴山付近から南京城門に突入することになり、隣接する左翼隊（歩兵第九連隊）との戦闘地境を第三峰——明孝陵北端——明故宮東北端を結ぶ線に変更された。

このため連隊の南方山麓方面の戦闘区域がかなり狭められたので、連隊長は十一日午前二時三十五分、第二大隊（第八中隊欠、工兵一小隊配属）をもつて第二峰から第一峰へ、左第一線の第三大隊（第十中隊欠）をもつて払暁、南側斜面沿いに、孫文の墓、南北の線に進出、その後両大隊は天文台高地を攻撃して太平門、富貴山に突進するよう、連隊命令を受けた。

（五）夜襲かけ第二峰占領

——第一峰攻略へ攻撃前進——

第二大隊は十日の攻撃によって、第二峰の稜線には進出したものの、その後、三八二・五高地の敵に前

進を阻止され、夜に入っただけで連隊長は十一日未明までに同高地の奪取を命じた。三浦大隊長は、狭い地形を考慮し、少数兵力での夜襲が適当であると判断して、第六中隊（中隊長、辻四五郎大尉）にその決行を命じた。

同中隊は果敢な攻撃を実施したが、手榴弾による頑強な敵の抵抗と、左側背から二百余名の敵の逆襲をうけ、多数の死傷者を出したので、攻撃は一時頓座するかにみえたが、未明になってようやく敵陣の一角を占領、大隊長は直ちに第七中隊をこれに増強して午前八時五十分、第二峰を完全に占領することができた。

左第一線の第三大隊は、南側斜面を前進したが、困難な地形と敵迫撃砲の射撃をうけて戦況の進展がみられず、第二大隊正面の進展にともない、ようやくその左翼後方の山腹に出ることができた。

連隊長は直ちに本部を第二峰に進め、第一線を督励しつつ第一峰の攻略を準備した。夜を徹することになったが、この夜再度師団参謀から「軍司令官宮殿下におかせ



死守する南京城の攻略に、砲兵の活躍はめざましかった

られては紫金山攻略に關し懸念あらせられ、その占領のすみやかならんことをご希望あらせられる」との電話を受けた。これは軍全般の戦況からみて、早急な紫金山第一峰の攻略を必要とする軍司令官の強い意志の表示である。

師団命令により連隊に配属された野砲兵第八中隊は、その夜ようやく連隊長の指揮下に下り、上五旗付近に陣地を占領した。

連隊の紫金山奪取に協力するはずだった師団砲兵、軍砲兵の一部も連絡不十分のため、これまでの戦闘には直接参加できなかったため、連隊は重火器部隊の総力をあげて闘ってきたが、なかでも中島純雄中尉指揮の速射砲中隊が稜線上に砲を据え、確実な照準によって敵トーチカの銃眼を射撃し、これを沈黙させたことは、第一線にとって大きな成果であった。

十二日午前零時四十五分、連隊長は第一峰攻略に関する次のような連隊命令をくだした。

(一) 第二大隊 (第八中隊、第七中隊ノ一小隊ヲ欠キ工兵一小隊配置) ハ、攻撃ヲ続行シテ第一峰ヲ攻略、次イデ天文台北部高地ヲ抜イテ大平門ニ進出、特ニ北方カラノ敵ヲ警戒セヨ。

(二) 第三大隊 (第十中隊欠) ハ、前面ノ敵陣地ヲ奪取シタ後、第一峰南麓高地ヨリ明孝陵北端付近ニワタル陣地、サラニ天文台南側高地ノ敵ヲ撃破シテ富貴山ニ進出セヨ。

(三) 第一線両大隊ノ戦闘地境ハ、第一峰東側閉鎖曲線高地ノ南麓——第一峰南東小閉鎖曲線——天文台ヲ連ヌル線トシ、第一線ハ砲兵ノ射撃効果ヲ利用シテ攻撃前進セヨ。ソノ時期ハ別命スル。

(四) 連隊砲、速射砲中隊ハ敵陣地ニオイテ両第一線トクニ右大隊ニ協力シテ第一峰高地ノ敵陣地ヲ射撃、

右第一線大隊ノ戦闘ニ協力セヨ。

この命令に基づき第二大隊は、左第一線に第七中隊の第二小隊（田中操曹長指揮）右第一線に第五中隊（脇岡直大尉指揮）これに機関銃一小隊（川戸正巳准尉指揮）工兵小隊を予備とした。

午前六時三十分、冬の朝は明けかかっていた。今日も雲一つない好天である。

第一峰を包んでいた薄い霧が晴れようとするころ、第一線は展開を終わって命令を待っている。敵は第五中隊正面の赤ハゲ高地と、第七中隊正面の三七一・〇高地に陣地を占領し、迫撃砲や重機を配備したトーチカや散兵壕を構築、その前方には高さ一、二メートルの屋根形鉄条網を張りめぐらして最後の決戦に備えている。

三浦大隊が第五中隊正面に攻撃の重点を指向し、攻撃前進を開始するや、敵の銃砲火はいっせいに火を吐いて第一線將兵に襲いかかってきた。教導総隊の精鋭をあげて、首都最後の防備を固めた支那軍の戦力は、あなどることのできないものであった。

第五中隊は重火器援護のもとに正面赤ハゲ高地の敵陣目ざして攻撃を開始したが、第二峰から第一峰に続く稜線は、馬の背のように狭くてけわしい。稜線の左側面は敵の側射を受けているので前進が困難であり、右斜面は数十メートルの断崖をなし、横広の隊形での前進は至難であるので、一列縦隊となつて前進するしかない。第七中隊の田中小隊も第五中隊も連係して前進を開始したが、これまた地形に制約されて思うように攻撃がはかどらない。午前九時になつて、第五中隊は一気に赤ハゲを奪取すべく、敵前数百メートルまで肉薄したが、高地からの敵の集中射撃にあい、前進が停滞してしまった。

ここで肱岡第五中隊長は、煙幕を使用する攻撃を企図し、第一線小隊にその使用を命じたので、付近一帯はたちまち白煙に包まれ、これを機に突撃を敢行、高地を占領することができた。敵はその後方、三七一・〇高地稜線方向から激しい十字砲火を浴びせてきたが、同中隊は一部をもって赤ハゲ高地を確保、主力は三七一・〇高地に向かい、攻撃前進を続けた。

その後、肱岡中隊長は、敵前視察中を狙撃されて負傷、戦線から退くことになり、その後は第一小隊長、奥野安次少尉が代理として指揮をとった。

大隊長は攻撃の重点を第七中隊正面に変更し、このため同中隊の第一小隊長、川戸正巳准尉に第二小隊を合わせ指揮することを命じたが、川戸准尉は田中小隊をそのまま左第一線とし、古市次郎軍曹指揮の第一小隊を右第一線として岩石の山肌をはいのぼり、まず鉄条網を破壊する。三七一・〇高地は、第一峰の正面直下であり、二線にわたり陣地が構築されていたが、第七中隊は重火器の援護下に接敵を続け、擲弾筒の射撃、手榴弾を投げていっせいに投入し、一挙に第二線陣地まで戦果を拡張した。

一方、左第一線の第三大隊は、第一峰南麓の松の疎林地帯で敵陣と相対し、苦戦を続けていたが、午後一時ごろ第九中隊長、井原義澄中尉、同中隊、駒谷一郎准尉などの幹部が相ついで負傷、井原中尉と交代した福田寅造少尉も戦死するという死闘であった。

三浦第二大隊長は、直ちに本部を三七一・〇高地に進めて攻撃を準備したが、時すでに午後二時、連隊の目標とする紫金山第一峰は折から午後の陽を浴びて、前方見上げるような高さにそびえており、これを死守しようとする敵の砲火は熾烈を極めている。

第十二章 紫金山攻撃

(一)

南京へ10^ロに肉薄

——連隊全兵力が集結を完了——

句容いらい連続四日間、句容—南京道の堅陣と戦いながら十二月九日午後五時半、下麒麟門（しもきりんもん）にはいった第一大隊（渡辺綱彦少佐）はそこで第一線をとかれひとまず師団予備として休養が与えられた。同夜、連隊主力も到着、連隊全兵力が集結を完了した。

下麒麟門から敵首都・南京（ナンキン）はもはや西へ十^ロたらずである。わが十六師団の属する第二軍・朝香兵团（司令官朝香中将宮）が東から迫れば南と西から柳川兵团の各部隊が包囲の輪を縮めていく。敵の背後（北側）は揚子江—文字どおり敵は「背水の陣」をしいて必死の防御態勢だ。

(二)

堅固な敵の防御

——まず第三峰をねらう——

紫金山——。「しきんざん」と読み、中国名はシウチンシャン。鍾山（しょうざん）ともいう。中山門か

ら東北へ二^{キロ}たらず、最高四百九十四^{メートル}、孫文（そんぶん）の墓・中山陵（ちゅうざんりょう）のある有名な山。同時に南京城の東を守る自然の要害でもあった。中国自身の戦争も、この山を争っていく度か戦われ、清末の光復革命のときには革命軍と清軍がこの山で激戦、頂上にはその記念碑が立っている。

山形はちょうど馬の背のようなかっこうで（このため兵力の集中がむずかしかった）東西に走り、その東南端にはあん（鞍）部を隔てて第三峰と呼ばれる標高二二七・五高地、西端近くに標高四八八・五^{メートル}の第一峰がそびえ立っている。その中間にあるのが第二峰三八二・五。主力は連隊本部、第九、第十中隊、第二大隊、連隊砲および速射砲中隊、連隊小行李、第二大隊の一個小隊の順序で前衛に続行、同八時三十分黄家庄付近に集結した。

野田連隊長は、青馬東方高地に出て敵情地形を偵察した。この結果、連隊長は攻撃の重点をまず第三峰と決めた。敵は紫金山一帯の高地を重要視し、ペトン製トーチ



南京10キロ手前の湯水鎮を望む

カ、えんがい銃座を無数に構え、幾線もの散兵壕を掘り、さらにその前には鉄条網を張りめぐらし堅固な永久陣地を構築していた。たびたび述べたように、紫金山こそ南京城防衛の第一の要害であり、軍官学校教導総隊約一個旅団を中心とする精鋭部隊が幾重にも守り固めていた。南京攻略の成否は、実に紫金山の攻略にかかっていたといっても過言ではない。

十二月十日午前七時。連隊は第三大隊（二中隊欠）を前衛として下麒麟門を出発した。あたりはまだ薄暗く、寒風が防寒服をつけない将兵のハダを刺す。まず上麒麟門西方四百^八付近から獅子具を経て青塘東北側地区に進み、第三峰および紫金山方向の敵情地形を偵察した。五高地である。また第一峰の西南あんに部を隔てて天文台高地が相對していた。中山陵のある南側山ろくは樹木がある以外はゆるやかな斜面だが、中腹からは傾斜が急になる。裏の北側はほとんど切り立ったような断崖で、容易に登ることができない。中腹あたりからは樹木はほとんど所々に雑木が生えているだけで紫金山の北面はビョウブのようなガケ続きで攻撃は極めて困難。南面はゆるい傾斜だが、敵はこの方面からの攻撃を予期して堅陣を張っている。そのうえこの方面からの攻撃は、まず本道方面の堅陣を突破しなければ不可能である。南京総攻撃を前に、紫金山攻略は急務であった。このため兵力使用地域が狭くとも東西にのびる紫金山を東からりよう線伝いに第三峰、第二峰、第一峰と攻撃する方が適當であった。野田隊長はこう判断したのである。

午前九時。野田連隊長は前衛としてすでに青馬村東北側に進出している第三大隊（上田孝少佐、9、10欠）を左第一線としてりよう線上に展開させ、第三峰攻撃を命じた。この日、隣接部隊との連絡、砲兵の協力は期待できず、配属された野砲兵第八中隊もこのころにはまだ到着していないので、連隊砲、速射砲

主力を第三大隊方面に協力させた。

一方、本隊内の第二大隊（三浦俊雄少佐、二と一小隊欠）は右第一線として三大隊の右、黄馬北側方向に展開させ、東側の比較的登りやすい方面から、まず紫金山の東北部に向け攻撃、第三大隊に協力するよう命じた。また第九隊（井原義澄中尉）を黄馬南側付近、つまり両第一線大隊の中間から紫金山東北角に向け攻撃させた。両大隊の間隔が相当離れているので、その連絡の意味もあった。第十中隊は連隊予備として第三大隊の後方に位置させた。

上田第三大隊長は、第十一中隊（松野亮作中尉）に第三峰正面を突くよう命じ、第九中隊は右翼から包囲するように散開、攻撃前進を開始した。

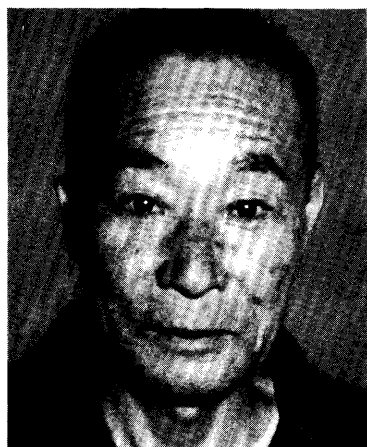
敵ははやくもものすごい射撃を浴びてきた。

（三） 総攻撃で第三峰占領

——しかし戦況はかどらず——



突撃前進の一步前の攻撃態勢



故 三浦俊雄第二大隊長

敵は堅固なトーチカ、数線の散兵壕からガン強に抵抗した。速射砲中隊（中島純雄中尉）は下麒麟門から青馬に至るけわしい道を、砲二門を分解はん送して青馬東北方の第一線に進出、正確な銃眼射撃で第三大隊主力を援護、さらに黄馬付近に陣地変換して第九中隊および第二大隊の攻撃に有効に協力した。一方、連隊砲中隊二門（安田治大尉）は、第三峰の北側あん部から紫金山南ろくに進出、主として第三大隊に協力した。こうして第三大隊はふもとの敵陣地から中腹へと肉薄した。このころ敵は後方から続々と兵を増加し、逆襲してきたが第一線は突撃を敢行、午前十時三十分、第三峰つまり標高二二七・五呎の高地を完全占領、さらに西方へと向かった。

一方、第二大隊の第一線はこのころ紫金山東北部斜面をじりじり登っている最中で、第九中隊はりょう線上に進出して第三大隊長の指揮下にはいった

両第一線大隊は、以後紫金山の東部付近から第二大隊を第一線、第三大隊を第二線として西方に向かい攻撃を続行、ことに第二大隊正面は敵兵力の増加で苦戦したが、午後四時第二峰高地東側コブ、次いで同六時その次のコブを奪取した。この日、午後四時ごろ、第五中隊（脇岡大尉）は連隊に復帰し、上五旗付近で三浦第二大隊長の指揮下にはいった。

一方、師団予備だった第一大隊（渡辺綱彦少佐）は、こ

の日連隊に復帰を命じられ、午後二時ごろ青馬東北側で連隊長の指揮下にはいった。この少し前、敵の大部隊がわが右側支隊の猛攻で鎮江—南京道に沿い盆路口方面に退却中なり、という連絡を受けていたので、復帰した第一大隊を直ちにこの方面に出し、敵をセン滅して連隊の右側背を安全にしようとした。連隊長は第一大隊を率いて上五旗に進出、有力な一部を下五旗北側に出して偵察したが、すでに敵の姿は見えず、下五旗に一個中隊を残し、盆路口方向に対し連隊の右側背を援護させ、午後七時その主力、予備隊を黄馬および青馬北端に集結、夜を徹して明朝へのりよう線進出を準備した。

連隊長はすみやかな第一峰奪取を期し午後六時二十五分「歩三三作命甲第一二八号」を下達、極力前面の敵を攻撃させた。第一線は夜間も攻撃を続けたが戦況ははかどらなかつた。これが十二月十日、第三峰攻略のあらましである。



この夜のことである。同日復帰した第一大隊主力を、さらに右側支隊に転属したいがどうかと、木佐木参謀から



紫金山上のわが軍塚

電話がかかってきた。

「右側支隊の兵力が少ないので軍司令官宮殿下はご懸念あらせられている。だが、紫金山の攻略は師団としても最も重要視しており、万難を排して奪取しなければならない。いま連隊の状況は、第一大隊を右側支隊に転属可能の状況にありや」

参謀の口調は熱をおびているが、野田連隊長の立ち場をじゅうぶんにわきまえていた。実際連隊の状況は二個大隊を掌握しているものの、それぞれ何個中隊かは欠いており、予備は一個中隊（しかも一小隊欠）に過ぎないという苦しい状態だ。だが野田連隊長は、参謀の意のあるところを謝し、

「二大隊で紫金山を攻略してみせる。第一大隊の転属はよろしい。ただし小銃一個中隊（第二中隊）だけを残しておいてもらおう」

ときっぱり返答をしたのであった。

（四）弾雨下に咲く人間愛

——宿命の子、ついに死ぬ——

紫金山第一峰攻略（十二月十二日）の前夜のことである。つまり十一日夕方、第二大隊（三浦俊雄少佐、津市丸之内）は南京城中山門から約三十キロの地点、湯水鎮に移動した。湯水鎮は、すでに述べたように、点々とした部落だが華中の有名な温泉郷。赤レンガ造りの別荘が建ち並んでいた。すでに三日前の八日朝、第一大隊が占領しており敵の影はなかった。その夜、兵士たちは久しぶりで温泉にひたって休養したもの

だった。

到着する日の夕方のことだ。大隊は湯水鎮のはずれにさしかかった。すると橋の中ほどに老婆と若い人妻の死体がある。二人とも日本刀で切られているところから、大隊の先に通った日本軍が殺したものとみられた。兵士たちは顔をくもらせて通り過ぎようとしたところ、死体のかげで、なにやらもぞもぞ動く。気づいた兵が足を止め、確かめると生後半年ぐらいの女の赤ん坊だった。とつくに硬直した母親の乳房にしがみついている。乳房をふくんでは——もちろん乳が出ない——顔を上げて泣きじゃくっている。

「よし、よし」

見かねた兵士は抱き上げた。



軍服姿の島田勝巳さん

その夜、巡察に出た第二機関銃中隊長（大尉）の島田勝巳さん（故人）は、赤ん坊の泣き声を耳にして、思わずあたりを見回した。積み重ねたワラの中に穴をつくり、夕方の赤ん坊が寝かされていた。どこでどう手に入れたのか乳を飲ませた形跡があった。そばには、まだ食べられもしないのにキヤラメルまで置いてある。兵士たちのささやかな心づかいに島田さんは思わずホロリとした。

当時、同大隊の軍医だった長谷川芳郎さん（七〇）現在在

津市白塚町で小児科医を開業Ⅱも赤ん坊を、

「ヨチ、ヨチ」

とあやした一人。

「一時間ほども抱いてもりをしました。栄養不足でやせていたが、かわいい子でしたよ」

となつかしんでいる。出発となった大隊は後続のシチヨウ（輜重）隊Ⅱ隊名不詳Ⅱに赤ん坊を託したⅡ。その後、風のたよりでは、そのシチヨウ隊があるときは部落民から母乳をもらい、あるときはミルクを見つけては育てながら南京城まで、無事に連れてきたという。

話は昭和十八年にとぶ。その年の七月、支那派遣軍報道部付き（総司令官、支那総軍畑元帥）となって南京に赴任した島田勝巳さんは、十月ごろ「大陸新報」（南京版）を見てびっくりした。

「宿命の子、ついに死ぬ」

こんな大見出しのついた記事だ。なんと、例の赤ん坊の話ではないか。記事を読むと、シチヨウ隊の車



南京城外の軍旗

に乗せられて南京に入城した赤ん坊は、この話を聞いた当時の松井石根最高司令官が名付け親となり「松子」と名をつけた。松子の松は松井の松からとったものだ。赤ん坊はその後居留民の手で育てられ、もう六歳になっていたが、ふとした病気がもとで死んでしまったという内容だった。戦場のど真ん中に生まれ、砲弾の下で育ちそして戦乱の町でしぼんでいった薄幸の小さな花——新聞の冷たい活字のとおり「宿命」の女兒だった。

このエピソードは多くの兵士たちが知っているが、当時第一中隊三小隊長だった宮本米吉さん(七九)津市西阿漕町岩田一一六も「わたしは直接赤ん坊を見たのではないが、話は聞いています。あのシチヨウ隊の名を、いまでも知りたいと思っています」としみじみ語っている。

(五) なれぬ小銃で応戦

——車両隊 敵の仮寝を襲う——

白茆口(はくぼうこう) 上陸以来、進攻また進攻の第一大隊(渡辺綱彦大隊長)は十二月九日南京東方約十^キの下麒麟門(しもきりんもん)に達し、同夜そこで第一線を解かれ、師団予備として休養が与えられることになった(既述)。だが、すぐに奈良三十八連隊に配属された。このとき大隊の車両隊の指揮を命じられ、部隊の後方を前進中、敵襲を受けた第一機関銃中隊小隊長(准尉)田中浅次郎さん志摩郡阿児町鵜方で食料品店経営の苦戦記である。第一機関銃中隊長は広七郎さん(伊勢市上野町)だった。

十日朝、田中准尉指揮の車両部隊は大隊の約十^キ後方を紫金山の右側から下関(シャアカン)方面向け



田中浅次郎さん

堤防伝いに前進を開始した。機関銃、大隊砲、行李（こうり）の一部など総勢二十五、六車両と馬の後方部隊である。途中、突然鎮江方向の敵砲台から集中砲撃を受け前進をはばまれた。馬と車両ばかりで動きがとりにくい。ともかく大急ぎで部落にとりつき、独立重砲八門が直ちに応戦を開始した。そこへ幸いわが海軍航空隊が飛来、敵砲台に猛爆を加えた。間もなく敵砲台は沈黙、兵士たちは「バンザイ」を叫んで再び前進を続けた。本道をそれて田の中を進むことになり、工兵隊の補修を頼りながら前進、その夜は紫金山の一角に露営した。

夜明けの五時ごろだ。後ろで敵のかん声があがった。

「敵襲だッ」

歩哨が叫んで回る。仮寝の夢を破られた兵士たちは、飛び起きるとありったけの武器をとって散開した。

ヤミをすかすとざわざわと敵兵がいっぱいだ。早くも、わが砲の陰まで接近する敵もいる。

ダガンッ、バガンッ

敵の手投げ弾がヤミをつんざいてサク裂した。独立騎兵隊の馬をつないだど真ん中に投げつけられたからたまらない。

ヒヒーンッ

馬が悲鳴をあげ、傷ついて暴れ回った。田中准尉は応戦

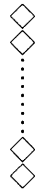
を叫ぶとともに下士官を伝令に出し、予備四中隊に救援を求めた。車両隊の兵士たちはなれぬ小銃を持って応戦、一方、砲兵は急拠ゼロ分角で砲撃、間もなく敵を右方向に撃退した。わが方の損害ゼロ。右に移動した敵は第二軍指令官、東久邇宮中将とともにぶつかり、わが高射砲の垂平射撃を浴びおびたらしい死体と捕虜を残して主力は退却して行った。あとで聞くと、この敵は鎮江から南京へ撤退途中の約三万だった。

「この敵と一緒に下関方面へ前進していたのである。敵も私達が敵であることに気付かずにいる。和平門を過ぎたころ、夜が明けてきたが、すかさず友軍の砲兵が盛んに打って来るから、さあ大変あぶない。私達は軍令が来て退却しなければならないのがくやくして仕方がない。もうすぐ下関の停車場である。見えているのである。そのとき敵が大混乱を起こして、我先に揚子江を渡り始めたが、満足にジャンクが動くものは数える程である。そのジャンク船群にも砲弾が飛び狂っている。あの揚子



紫金山の敵陣地

江岸で、何万人という敵が死にも狂いで逃げようとしている。なだれを打って押し寄せたのだから手のつけようがなかったのだらう。敵と敵との同士打ちが始まる。揚子江へ落ち込んで溺れる。こちら側のクリークへ落ち込んで溺れる。その上へ又人が重なって死ぬ。私達はこの凄惨な状況を目撃していたが手のつけようがなかった。これがあとでいわれる南京の虐殺事件といわれたのではなかったのだろうか」と田中さんは回想している。



話は前後するが、華北討伐中の話をひとつ――。

討伐隊はその日も川や谷を越え討伐に出発した。とある部落に寄ると密偵が、対山の部落に二十人ほどの共産匪がたむろしているとの情報を伝えた。田中准尉は直ちに山腹に重機をすえると通訳を送った。

「日本軍が攻撃にきた。降服せよ」

と伝えたが、敵は、

「われわれは死んでも生き返ってくる。日本軍にやられてたまるか」

と拒否、山腹に出てきて青竜刀を振り回し、何やらわめき回っておどり始める始末。再度降服をすすめたが相手にしない。

「よしッ」

ダダダッ.....

ごう然と火を吐いた重機が敵をなぎ倒した。距離約五百、同行した砲兵らには――戦場心理として――痛快

な見物だった。敵は十七、八個の死体を残し、ひとりだけ逃走して行つた。彼らの服を調べると、一様にボン字を切り抜いた紙切れを懷中に持っていた。おまじないどおり、その後彼らが生き返ったかどうかは知らない。

田中さんは大正十五年兵。昭和九年満州へ、十一年に帰り、引き続き日華事変に参加、十四年ガイ旋後三十三連隊本部付き、十八年百五十一連隊補充隊副官、二十年四四三連隊（護京）の副官で鳥羽で任務中、大尉で終戦、まる十九年間軍隊生活をしたことになる。

第十三章 紫金山第三峰攻略

(一) まるで登山のよう

第九
中隊 紫金山第三峰の占領



間柄 馨さん

句容いらい連続四日間、句容―南京道の堅陣を次々と奪取、十二月九日午後五時半、下麒麟門（しもきりんもん）―東京の上野にある、彰義隊が幕末に戦った黒門を思い出す構えである。戦争は一木一草とておろそかにすることの出来ないもので、有名な麒麟門も要害ではないが友軍の目標であった。まで前進して土堤に小休止していたとき、ごそごそと山の中から出て来た将校がある。

「小隊長はおらぬか。中隊長はおらぬか」と呼ぶ声がする。

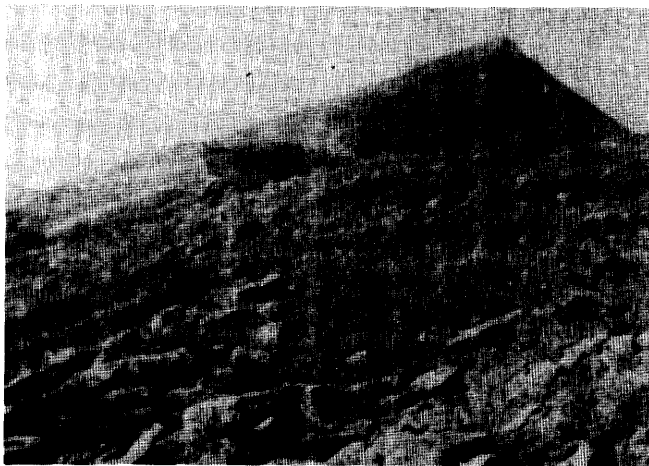
「私が第一機関銃の小隊長、田中准尉です」と名乗ると、

「連日苦劳かけたな、兵隊にも多勢の犠牲を出した、お前ところばかり使って来たが許してくれ。」

と涙を流している。思わず貰い泣きをした。紫金山は見えるし、気はやる、もう一息と構えているとき、『しばらく第一大隊は休養をとって貰うことにしたから休んでくれ』—といわれたのでガッカリしました。ここで第一大隊は第一線をとかれ、ひとまず師団予備隊となり休養が与えられたが攻撃がどれだけしたかったことか。若かったのですね。ところが休養も一夜明ければ『連隊の主力をもって紫金山奪取せんとす』との命令が下った、嬉しいやら武者振いやら」と田中さんは語る。

松阪市の山室一〇一八、間柄馨さんは、そのとき第九中隊の小隊長として中第一線突撃隊の隊長として紫金山の第三峰の攻撃を敢行した人。

同中隊(中隊長・井原義澄中尉)は黄馬南側付近、つまり左右第一線大隊の中間から紫金山東北角めざし攻撃をかけた。第三大隊の展開した正面、第三峰(標高二二七・五メートル)は山脚までなだらかな起伏が続き、山脚から急に傾斜がけわしくなる。九中隊が二百メートルほど前進すると、山脚付近のトーチカが猛然と火を吐いた。付近は小さな松がばらばらとあるだけで、えん護物はない。将兵は敵弾を縫って次々と前進する。渡辺一等兵(四日市)は腹をやられ後方へ下げる。こう



紫金山上の敵陣地

した状況を見て、速射砲中隊がトーチカ銃眼にりゅう散弾をぶち込む。第二発目から命中、銃眼から壕（う）内に吸い込まれたタマは内部で炸（さく）裂、たちまち白煙を吹き出し、敵銃座は沈黙する。

九中隊のとりついた第三峰北面は山脚から四十五度以上もある急斜面が頂上まで続く。頂上付近は大きな岩を積み重ねたような岩山だ。山頂に陣取る敵は山脈の中隊を射撃しようとするが、急斜面で岩石のコボコが激しいため、死角が多くて撃てないらしい。

もちろん、九中隊からも敵兵は見えない。「まるで登山のようだぜ」。古参兵がみんなを元気づける。めくら撃ちの敵弾は味方のはるか上を流れてゆく。

谷間、ガケを各個に前進する中隊は八、九合目付近でいったん兵をまとめた。敵陣は三、四十^{メートル}前方にあり、手投げ弾を投げ始めたからだ。こちらは投げようにも、上に向かつては投げられない。

井原中隊長は、いったん手投げ弾の届かない線まで兵を下げ、田嶋良一^{ラッパ}手に突撃^{ラッパ}を吹かせ、兵士たちに「わあーッ」と大喚声をあげさせた。いまにも突撃するかのような擬声だ。敵はまんまと引つかかって手投げ弾をバラバラに放ってきた。しばらく間を置いてまた喚声をあげ、敵をけん制する。三回目には手投げ弾が尽きたか、退却したのか反応がない。

「行くぞ」将兵は山上めざし一気にかける。時に午前十時過ぎ。先頭を切っていた多賀芳男（松阪市伊勢寺出身）田嶋^両ラッパ手はじめ、井原中隊長、間柄、駒谷（一郎）、^両小隊らが相次いで突つ込む。九州男児の井原中尉は、壕内に三人の敵兵を認めると、たちまちその一人を軍刀でたたき切り、振り向きざま二人目に切りつけた。ところが敵カブトをしたたたき刀が曲った。後続の部下がこの敵にとどめ

を刺す。九中隊は第三峰頂上に日章旗をひるがえした。

同じころ、左第一線の第十一中隊も頂上を占領、こうして第三峰はあつてなく両中隊が占領した。

しかし、息つく間もなく右や前方の第二峰敵陣地から機関銃の激しい側射を浴びせられた。山頂にいた兵がやられたのを見た浮名達治郎衛生兵（南牟婁郡出身）は、手当てのため飛び出したが、あつという間に鉄カブトの星章を射ぬかれ即死した。両中隊はひとまず敵壕に飛び込み、確保して露営した。その次の夜、間柄小尉は部下一個分隊を率いて将校斥候に出た。間柄さんはその翌朝、第一峰の戦闘で右肩に貫通銃創を受け後退した。

◇

第十一中隊の第一小隊長（少尉）だった員弁郡藤原町、野々正巳さんは「松野中隊長の命令で、一番乗りした将兵の名を、占領と同時に報告せよ、とのことだが小隊は第一線で岩山をよじ登ったものでした」と回想している。

（二）

前方に黒い影浮かぶ

——静けさをつんざく銃声——



故 曾我平蔵さん

第一大隊は、紫金山の右側すなわち紫金山を包囲する目的の下に山麓に沿い攻撃前進。各所で小競り合いをしながら

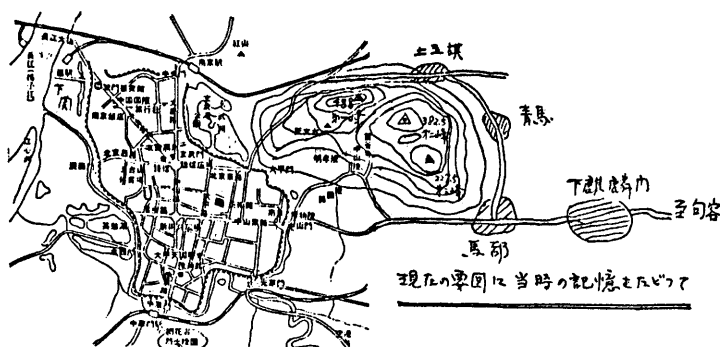
らもこれをけちらして第三峰の背後に至っている。

第二大隊は左第一線、紫金山のなだらかな小松林の中を山頂めざして攻撃前進している。

第三大隊は中第一線、その第一の砦（とりで）である第三峰奪取の敵命が下った。最も危険な攻撃正面ではあるが、奪取価値のあるところだけに張り切ったのであった。

第九中隊第二小隊第二分隊、上等兵だった故曾我平蔵さん（鈴鹿郡関町鷲山）の体験談を紹介しよう。

十日午後、紫金山第三峰を占領した第九中隊は、十一日は予備隊となつて同地点を確保していた。小春日和の天気で、睡眠をむさぼった。前夜は警戒と寒さのため一睡もしていなかった。この日、第五中隊に属しているいとこの新家正一上等兵（桑名市出身、母と三人の姉妹、徐州戦後戦死）に出会い「お互いにしつかりやろう」と励まし合い別れた。彼らの中隊は第一線へ進出して行った。その日も暮れ、紫金山には寒気が迫ってきた。（今夜は、シナ兵から奪った毛布があるから眠れるぞ）と思つたときだった。明日の攻撃に備え将校斥候を出せとの連隊命令



が出た。小隊長間柄馨少尉（松阪市山室）以下分隊長松井伍長、山田、後藤、笠井の各二等兵、それに第二分隊の曾我、山田両上等兵、南出一等兵の計八人が斥候を命じられた。

今夜も月が中天にかかり冷たい光が山頂に降りそそいでいる。斥候はりよう線避け、山腹の岩はだをひそかに前進する。あたりは戦場とも思えぬほど、静まりかえっている。いっそう無気味だ。靴先が岩をはじく音に、頭髮が逆立つ。緊張のあまり口はからから、目だけは、らんらん敵陣の方をにらむ。虫ケラがはうようにして三、四百^が進んだとき、前方に黒い影が動くのを発見した。岩かげにへばりついて様子うかがうと敵歩哨線らしい。斥候はそつと敵兵を避け、う回してさらに百^がばかり進む。竹ヤブがあった。その中でひと息つく。するとガサガサと竹を分けてこちらに向かつてくる数人の気配。「気をつけろ」間柄小隊長の押し殺した声にじつと地に伏せ、小銃の撃てつを起こした。数個の影も警戒しながら近づいてくる。両者の間に殺気がみなぎった。（がまんならぬッ）引き金をしぼろうとしたとき、月がこうこうと光を増し、竹ヤブからにゅつと首を出した相手の顔を照らし出した。その瞬間（ほーっ）安心の吐息が殺気をほぐした。味方だ。第十一中隊の将校斥候だった。（やれやれ）双方の将兵はがつくり肩で息をつき苦笑いし合う。直ちに両小隊長が打ち合わせをし、再び薄明かりの中に別れた。九中隊の斥候はさらに七、八百^が進んだ。ふと山のすそで火が見える。敵陣に間違いなからう。

「おれと松井伍長が調べに降りる。曾我上等兵は他に指揮し現在地で待機せよ」
間柄少尉はそう命令し、松井分隊長とともに右側方向に姿を消した。

残った六人はその場に身をひそめ、目と耳に全神経を集め待機する。そして三十分——一時間、間柄小隊

長からの連絡を待ったが、何の音さたもない。じりじりし始めたときだ。前方に黒い影が浮かび上がった（小隊長か、それとも分隊長か。きつと連絡に帰ったに違いない）

「小隊長殿ですか」小声で呼んでみた。すると、その影は六人の前方二、三十歩の前でぴたと止まった。（敵か？）冷汗が背筋を走った。同時に影は短銃を抜いた。

ダーンッ。

こう音があたりの静けさをつんざいた。紫金山全山に鳴り響いたかと思える銃声。モーゼル短銃だ。敵巡回将校だ。

「撃てッ」

曾我上等兵は思わずどなった。六つの銃声は黒い影に集中。敵将校はのけぞった。だが、この銃声に驚いた敵陣地は一斉に火を吐いた。（しまったッ）だが遅い。敵はチェコ銃弾を集中してきた。弾を浴びるとは、まったくこのことだった。一步も動けない（下がりましたよう）兵がそでを引く。だが小隊長、分隊長はさらに前にいるのだ。「この場で死すとも一步も退くなッ」曾我上等兵は部下を励まし皇大神宮に祈った。約二十分。敵も撃ち方を止め、やがて間柄小隊長らは無事な姿を見せた。「あとへ」の号令で中隊本部に帰る途中、砲弾跡に数人の敵がひそんでいるのを、最後尾を歩いていた後藤一等兵（員弁郡大安町梅戸井出身）が発見、刺殺して帰隊した。時に午前三時だった。うとうとして同四時、最高峰攻略に出撃した。

第十四章 紫金山第二峰攻略

(一) うなり増す重、野砲陣

——「南京落とせば終わる」——

十二月十日午前十時三十分、紫金山第三峰はおもに第九、第十一中隊の奮戦によって完全にわが連隊の手に落ちた。そして正午——。

將兵の祈りもむなしく、投降勧告文に対する中国軍の回答はなかった。直ちに日本軍は南京城総攻撃の火ぶたを切った。ついさつき奪ったばかりの敵陣を確保する將兵の頭上を、おびただしい友軍機が南京城をめざして飛んで行く。日中兩軍の重、野砲陣がうなりを上げて飛びかう。山上から見降ろせば南京城は眼下に広がり、その光華門城壁に突撃を敢行しているのは金沢第九師団だ。だが、敵は紫金山上に観測所を設け、的確に友軍をたたいている。わが連隊の紫金山攻略は、いまや一刻の猶予も許されない状態となった。

「南京を落とせば戦争は終わる」郷土の將兵はそう信じてふるいたった。





故 岡村正雄少尉

連隊は十日午後十時（受領は午前一時半ごろ）の師団命令に基づきいぜん攻撃を続行、紫金山第一峰を占領し、大平門富貴山付近から南京城へ突入する作戦だ。師団命令によって左翼隊（九連隊）との戦闘地境が第三峰―明孝陵北端―明故宮東北端を結ぶ線に変更されたため連隊の南ろく面の戦闘区域はかなり狭められた。このため十一日午前二時三十五分「歩三三作命甲第一二九号」を下し、右第一線の第二大隊（8、7の一小隊欠、工兵一小隊配属）が第二峰、次いで第一峰を、一方左第一線の第三大隊（10欠）は払暁、南側斜面沿いに孫文の墓南北に進出、その後両第一線大隊は天文台高地を攻撃、大平門富貴山に向かう体制をとった。また連隊砲、速射砲は夜が明けてからおもに第二大隊、一部で第三大隊の攻撃に協力するよう命じた。

さて、第二大隊は十日の攻撃で第二峰りよう線へ進出したものの、三八二・五高地の敵陣にはばまれ、クギづけのまま日没となった。連隊長は明十一日未明までに同高地付近を奪取せよと命じた。三浦大隊長は一帶の狭い地形を考慮して、一個中隊（第六中隊）で夜襲するのが適当であると判断し、断行した。第六中隊（辻四五郎大尉）は手投げ弾によるガン強な敵の抵抗を受け、また左側背から約二百人の敵に逆襲されるなど約七十人の死傷を出し一時攻撃はくじけたが、ついに夜明け方陣地の一角を占領した。大隊長は夜明けとともに第七中隊を増援、午前八時五



十分第二峰を完全に占領、代わって機関銃一個小隊を配属された第五中隊（脇岡直大尉）が第一線に出た。

一方、第三大隊は左第一線として南側斜面を前進したが地形が悪くて敵迫撃砲弾にさらされ、戦況はかどらなかつた。しかし、第二大隊正面の進出で、そのやや左翼後の山腹に進出することができた。

紫金山攻略を急ぐ連隊長は第二峰に進出、同日午後四時三十分「歩三三作命甲第一三〇号」を下して、りよう線（含む）北側の第二大隊、同南側の第三大隊を、ほぼ同じ線上に進出させ第一線を督励、第一峰攻略を着々準備しながら夜を徹した。この日再度師団参謀から電話で紫金山攻略を催促された。

「軍司令官宮殿下ニオカセラレテハ、紫金山攻略ニ関シ御懸念アラセラレ、ソノ占領ノスミヤカナランコトヲ御希望アラセラルト。」



連隊に配属された野砲兵第八中隊は十一日の夜になってやっと連隊長の指揮下に



紫金山第三峰占領後、その敵陣に掘り第二峰を狙うわが郷土部隊

はいり、上五旗付近に陣地を構えて第二大隊を援護した。師団砲兵、軍砲兵の一部も師団幕僚の配慮によつて連隊に協力する手はずだったが、連絡不十分で効果が發揮できなかった。このため連隊は手持ちの重火器―連隊砲、速射砲、大隊砲、機関銃をフルに動かして戦った。各隊はけわしい山頂に火器を引き上げ第一線の突撃を助けた。中でも速射砲中隊の正確無比の銃眼射撃はすばらしかったが、第三大隊方面に協力していた岡村正雄少尉は指揮中、十日午後三時四十三分頭を射貫されて戦死した。これが十一日、第二峰攻略のあらましである。

(二) 合言葉は「津―久居」

――夜襲に必要、追加命令――

十二月十日、紫金山第二峰に夜襲をかけた第六中隊。その中隊長（大尉）だった四日市市前田町北部二二九、辻四五郎さんは「戦闘ほど教訓を受ける機会はない」とその夜の体験を語っている。

右第一線で第二峰に攻撃前進した第二大隊（三浦俊雄少佐）その第一線である辻第六中隊は、かろうじて第二峰りよう線へ進出したものの、三八二高地の敵陣にがっちりばまれ、クギづけのまま夜にはいった。全般的な戦況からみて、南京占領は紫金山攻略の成否に、紫金山攻略は第二峰奪取のいかんにかかっていた。だが、馬の背のような紫金山の地形では、大量の兵や重火器の投入はむずかしい。三浦大隊長は、ついに午後八時「前回の敵陣地を、夜襲によつて奪取すべし」と六中隊に命じた。

辻中隊長は直ちに分隊長以上で十数組の斥候を出し、敵状や地形を探った。半月が山上を照らし、偵察

にはもってこいの夜だった。午後九時ごろ、焼き打ちをはかった敵は、南側斜面の枯れ草に火を放ったが、大事に至らず間もなく消えてしまった。夜がふけると、いつか両軍の砲火もおとろえ、あたりは無気味なほど静まりかえった。冬の山は急に気温を下げ、ふもとから吹き上げてくる風は、疲れた兵士たちのからだのシンまで冷気を突きとおした。

斥候の報告を総合して、中隊は夜襲の準備にかかった。敵の守備兵力は少なくとも百人以上、トーチカ、えんがい銃座、散兵壕からなる陣地を構え、さらに陣地の前に三本の鉄条網を張りめぐらしている。そこで辻中隊長は、まず、りよう線上に重機を据えてけん制射撃し、その間に中隊は南側斜面から回り道して鉄条網を越え、敵の右側背をつく作戦をとった。夜襲は奇襲と強襲からなっている。奇襲はどろぼうの忍び込みと同じだ。兵たちは音のないようにクツの上にクツ下をはいた



攻撃、前進

り、帯剣をはずしていくなどすべての音を消し、じりッ、じりッと地をはうように前進する。だが、あき巢ねらいと違って、目的地には敵が待ち構えているのだから、発見されるのは時間の問題だ。敵に発砲されてしまったからには、たちまち奇襲は夜襲と変わって突撃だ。奇襲から強襲に移るチャンス来判断する責任が指揮官にあり、この判断が指揮官にとつては最も苦しいときだ。夜間の発砲は損害こそあつても、味方に利益なしとは、過去の夜襲の経験が「絶対」と教えていた。日露戦役当時は「夜は発砲しない方がよい」と教えられていたが、日華事変になってからは「夜間は射撃を禁ず」に変わっていた。辻中隊長は、部下に銃の遊底をはずさせてハンカチでくるみ、ポケットにしまわせたこともあった。

辻中隊長は、頭に刻み込んだのである。「作戦要務令」を一項目ずつ確認して命令を下した。中隊長七年という古参だけに、もとより「典範令」は暗記していた。その夜もいつもそんな調子で命令を下したのだったが、なんとなくムシが知らせるのか、記憶だけではおちつかず、改めて「作戦要務令」の黒い表紙をひらいて、もう一度確認してみる気になった。自分が、たったいま部下にくだした命令と要務令とを一項目ずつ



敵の放棄した壕内での朝

確かめていくうち「しまった！。大事なことを忘れてしまった」思わず飛び上がった。

「こりゃいかん」とあわてたのは当然だった。夜襲には忘れてはならない「合言葉」を命令するのを忘れていたのだった。正面の敵指揮官はほとんど南京の軍官学校出で、日本語はべらべらだ。夜間、ぶつかりと「辻中隊か」と声をかけてくる。「おう」と答えようものなら、たちまち襲われる始末だ。だから、この夜襲では合言葉が絶対必要だった。辻中隊長は急ぎ「津—久居」の合言葉を決め追加命令した。

(三) 死にも狂いで前進

——砲を据え付け反撃開始——

このとき大隊砲小隊長が、鈴鹿市江島町五—三二七九の野呂征久さんである。

友軍が次々とやられていることは見えている。側防火器、トーチカによる敵陣から、登って来るわが軍を狙い撃つのであるから損害はひどくなる一方である。「大隊砲は何をやっているのだ」と、鉄火のごとき上司からの怒りに似た催促はよくわかるが、私たちも死にも狂いである。砲を分解搬送、馬は後方につないであるし、あの峻険（しゅんけん）な道路で、岩石だけの登山道。また小松林で身を寄せ宿す何ものもないところを黙々と全員肩力運搬しているのである。シュ、シュ、シュ、パチ、パチ、と足元の岩石に火花を散らす小銃、機関銃弾。これが危ないのであるが、弾が来るから砲を置いて隠れるわけにはいかない。逃げるわけにはいかない。なるようになれ、と半ば死ぬとあきらめていた死の前進。「この大隊砲隊の気も知らんと何をいつてるんだ」と、こちらが怒りたくなるが、そんな理屈が通る戦場ではない。

部下の兵隊も死にもの狂いで、あの紫金山へ登る一本の登山道を前進した。

それでも十日には頂上付近に進出できた。砲は敵から見えないところで壕を掘り、据えるのが常道であるが、そんな余裕のあったものではない。だが、観測所だけは第一線に出なければならぬ、敵情の見るところへ陣地を構えねばならない。その観測所の位置決定が大変、弾丸の下で、はいずりながらあちらへ行き、こちらへ行き場所設定である。敵兵は、この動作が実にうまく、教範通りやっている。わが軍に犠牲が多かったのも、教範通りやらず横着をきめていたことが原因と考えることもあった。

このときも、敵との距離は二百い、こうした状況の下で動けば打ってくる。ザーツとである。パン、パンどころの騒ぎではない。トーチカの中から細大もらさず監視しているのだから、たまったものではない。一歩動くのもほふくである。ころげ回るのである。この陣地侵入地の偵察中に幸か、不幸か、ころげ

落ちたところが、敵の退却放棄して行つた壕の中で、土のうもたくさんある、しめた！

「おい、ここを観測所とする」

大声で厳命した。実をいえば弾がひときにバケツをひっくり返したような音とともにザアと飛んで来たから、ひっくり返つて壕に落ち込んだのが幸いしたのであった。戦場ではいかなることがあつても女々しく逃げ隠れたとあつては兵隊の統率ができない。また戦闘の士気にかかわるか



野呂征久さん

ら、よけい大声で怒鳴ったのであろう。あの瞬間考えさせられた。死はもとより覚悟していたが、おれが逃げたのやないか、隠れたのやないか、と兵隊に思われては大変だからである。敵に後ろを見せてはならない。居常軍人は泰然たるべし」と、弾丸雨飛の中にあっても身の危険等は寸毫（ごう）も考えなかったといえ、今の人は何というかわからないが、長い軍隊生活中、常に頭から離れない戒めでもあった。

そこで戦争の話に戻るが、あれだけの激戦であったのに妙なものの、あれだけ弾の来る中で、あれだけ無謀と思われる行動をし、苦勞したが、皆が緊張し切っていたのか犠牲者も出さず砲の据え付けを完了し、観測所を設置できたのは天佑神助だった。こうなれば、もうこっちのもの、撃ちまくった。それから百発百中、日ごろの訓練がものの見事に生き、生かされて撃ちまくった。トーチカへすいこまれるように入って行く、胸のすくような戦闘ができた。われよくぞ男にされた——とはあのときのころよさをいうのだろうか。軍人として冥利（みより）に尽きるといふのだろうか。だが、その十一日の夜は敵陣から二回の襲撃を受けたが、前面には九中隊と十一中隊第三機関銃中隊がいたから、その支援を受け、



攻撃中の大隊砲

ことなきを得た。歩兵砲は夜、小銃中隊の援護がないと生きた心地はしないもの。明けて十二日紫金山攻撃左第一線の山ろくから天文台、第二峰と攻撃している第二大隊の六中隊、七中隊と第三峰占領の余勢をかって第二峰を攻撃する第一大隊の九中隊と十一中隊により第二峰は占領されたのである。その苦戦談は既述の通りである。

(四) 逆襲受け死傷者続出

——第二分隊が援護、敵払う——

十一日午前五時過ぎ、辻四五郎大尉の第六中隊は行動を起こした。夜明けまで二時間余すでに月はかくれ、あたりは真つ暗やみだった。りよう線で重機がけん制射撃を始めたのをきっかけに中隊はひとまず南

側斜面をおり、鉄条網を渡りかけた。第一線は高さ一公尺の屋根型、二線目は網型鉄条網。六中隊員百六十二人は真つ暗の中を手さぐりで越えたが足をとられたり銃をひっかけたりして隊がくずれ出した。敵前わずか五、六公尺、強襲へのチャンスだ、と判断した辻中隊長が「突撃」合図の白旗を振ろうとした瞬間

ドカーン!

あたり一面に手投げ弾がサク裂した。敵は夜襲を察知し



横山孝三さん

ていたのだ。全員その場に伏せたがたちまち負傷者が続出する。

「中隊長負傷ッ、横山少尉指揮をとれッ」

ヤミの中に叫ぶ声。第一小隊長、横山孝三少尉が、

「突っ込めーッ」

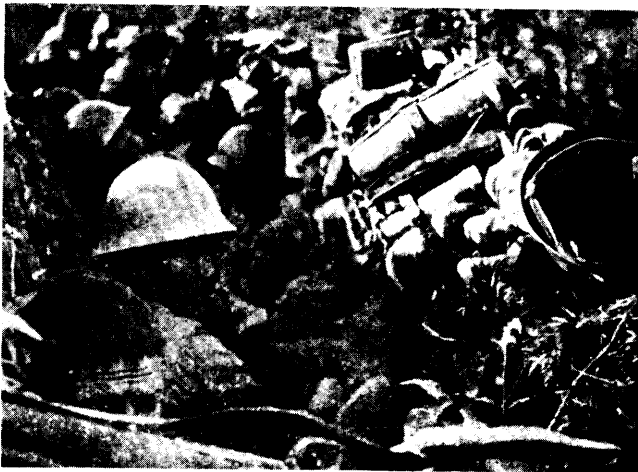
と軍刀を振りかざしたが、不意の敵襲で隊形は混乱、将兵はばらばらに斜面をかけ上がって突進して行く。

岩かどから躍進に移った黒部秋一上等兵（度会郡小俣町出身）が手投げ弾を浴びてのけぞる。次々と投げ込んでくる手投げ弾であたりは一時昼間のような明るさ。

「やられたッ」

と絶叫して倒れる将兵の姿を照らし出してはヤミに包む。

前方拠点を奪い、敵主陣地約二十メートルまで突っ込んだ横山少尉と第三小隊長、笠井甚吉准尉が、同時に手投げ弾で腕と足をやられ倒れる。これを見た名倉次二軍曹（四日市市内部出身）が「くそッ」と叫び、中隊指揮班七、八人を激励し、戦友を乗り越え猛牛のように敵陣へなぐり込んだ。たちまち数人の敵を血祭にあげたが胸を射ち貫かれ戦死した。だが、続く将



敵の壕に拠る第33連隊の将兵

兵は数人ずつ一団となって肉薄、ついに第二峰の一角を奪取した。

夜明けとともに敵は南ろく、中山陵付近から六中隊めざし機関銃で激しい背射を浴びせ、約二百人で逆襲をかけてきた。連隊の紫金山攻撃は予定どおり進展していなかったが、それでも隣接部隊よりもずっと先に出ていた。このため隣接部隊正面の敵の側背をおびやかすと同時に、六中隊自らも左側背をおびやかされる羽目に陥ったのだ。

敵の激しい逆襲の前に斜面にいた兵はばたばたと倒れ、負傷したまま斜面の下にいた将兵は身をかくす場所もなく、軽傷者は重傷に、重傷者は一人で三十数発もの敵弾を受け戦死して行く。このまま全滅かと思われたとき、速射砲中隊が分解した砲一門をかつぎ上げて第二りよう線東方に現われた。川瀬准尉指揮の第二分隊だ。

すばやく陣地進入し（午前七時十分）側射していたチェコ銃座にリュウ弾をぶち込んだ。敵銃座はわずか数発で木っばみじん、援護射撃を失った敵兵は四散して行った。

「戦闘後、第六中隊長辻大尉いわく、当時第六中隊は夜襲後兵力その半を失い力攻中約二百名の敵に四周を包囲せられ、いまはこれまでと決したり。しかるに速射砲の精確なる射撃、機関銃の制圧射撃により敵はようやく動揺して四散し、また機関銃沈黙し完全に該高地を占領し任務を達するを得たり。あの時こそ中隊全員双手をあげて喜びたり。『誠にありがとう』と……」

速射砲中隊はその戦闘詳報にこう記録している。同中隊が奪取後の敵えんがい壕を調べてみると、十五、六人の敵兵が折り重なって死んでいた。いかに彼らがガン強に、入れかわり立ちかわり銃眼を死守したか

を物語っていた。速射砲中隊は同九時陣地を撤し第一線に追及、第五中隊の戦闘に協力した。

第六中隊の苦戦の状況を知った三浦大隊長は急拠第七中隊に増援を命じた。機関銃一個小隊を配属された第七中隊はりよう線沿いに攻撃前進を開始、南側に回った第六中隊と反対側の地形のけわしい北側斜面を進み、三八五高地東端にとりついて確保、間もなく第五中隊と一線を交代した。

(五) 成功は工兵の奮戦

——忘れ得ぬトーチカ爆破——

この第二峰奪取の功績は、工兵の奮戦にあったと語る笠井甚吉少尉（久居市元町二二五二、八十三歳）の話。



笠井甚吉さん

紫金山第二峰の前面には、二重三重の鉄条網を張りめぐらした陣地が、いくつものトーチカにより擁護されている。ここから重機関銃、迫撃砲が距離測定され試射された後、据え付けが行われているのだから（後日、捕虜からの証言）これを攻撃奪取するのは神業でない限り、犠牲を出さない攻撃は不可能であった。

この陣地攻撃、奪取のため私達の中隊に、伏見工兵第十六連隊の何中隊だったか忘れたが、二個分隊配属されて来

たのであつた。

私達の第六中隊が第一線正面攻撃中隊、私の小隊が尖兵突撃隊であるから、その前面に出て鉄条網を破壊しトーチカを制圧してくれる工兵は神様である。私は拝んでいた。兵隊は、工兵の作業成功と同時に突撃前進する。その時間は十二月十一日薄明の午前五時と定められていたから、この命令を下達して待機したのであつた。

前日までの連日連夜にわたる戦闘で疲労こんぱいしている兵は他愛ないもので、紫金山の第二峰三八二・五の稜線——十二月十一日の中支の深夜は外套を通して冷気しんしんたるものであつたが、皆居眠りしている。しかも、二十二、三歳の現役兵が中心である私の中隊の兵隊の寝姿はかわい限りであつた。一方、工兵は黙々と鉄条網にもぐり込んで、何の音もなく破壊作業を行つてくれている。総てが暗黒の中である。

午前五時、一大音響とともにトーチカが爆破された。あの瞬間の思い出、あの爆破の音は忘れることが出来ない。今でもありありと記憶に止められている。大爆発の音とともにあたり一面が真昼のようになった。工兵隊が二名、宙空に舞い上がつて前面のトーチカは完全に爆破されたので、突撃を命令し一斉に鉄条網を踏み越えて突つ込んだのであつた。

そしてトーチカを完全占領し、第二峰を奪取したので、岩角に寄り沿つたところへ上の方から手榴弾が投げ込まれ、私達二人が足と手をやられた。

これを見て中隊指揮班の名倉軍曹が「野郎許さん、俺に続け」と飛び出そうとするから「止めとけ。今

は危険だ。情況を見てからやれ」と止めたが、友軍が次々とやられる戦場の残酷を見ると、だれでも血気にはやるのを抑えきれものではない。止める方が無理だったのかも知れない。

名倉軍曹は優秀な下士官で惜しいことをした。妹思いで、戦死した後、その背のうから妹に与える遺書が出て来た。自分が死んだ後の父母への孝養が切々とつづられてあった。

その朝も、「小隊長、腹が減っては戦が出来んから」と私の飯盒に昼、夕、朝の三食分を詰め込んでくれたが、戦闘中この飯盒に敵弾が命中した。昼食も夕食も抜きで戦い、その戦闘が終わって戦場掃除に出かけたとき、ご飯の一杯詰まった私の飯盒を見つけ、その中には三発の敵弾が入っていた。

名倉軍曹が思いきり固くつめてくれた飯盒のお蔭で私も命拾いしたのだと、今でもこの飯盒を大切に保存している。そして名倉軍曹に感謝している。



敵に肉薄する兵士

(六) 弾薬のあるだけ撃て

——うなる重機、敵陣へ突入——

第一線を交代した第六中隊の損害は戦死九、戦傷六十二の計七十一を数えた。夜襲前の兵力百六十二だから一夜で半数の兵力を失ったのだ。いかに激烈な戦いであったかを物語っている。この敵はもちろん教導総隊の精鋭であり、わが連隊が隣接の第九連隊方面よりかなり第一線（西方）へ進出していたため、隣接部隊正面の敵より左側背を突かれたのであった。第六中隊だけでなく、同夜（十一日）左後方第九連隊第一線付近に位置していた連隊砲中隊も敵の夜襲を受け、連隊の右側方は盆路口西南方高地の敵から重火器の遠距離射撃を受けたのであった。

さて、第二峰を占領した第二大隊はめざす第一峰に攻撃前進を開始した。敵はりよう線沿いに数線の抵抗陣地を築いて第一峰の守りを固めている。わが第一線は午前十時十五分ごろには第二峰西端にコブ状に突起している三五五高地西端まで進出した。めざす第二峰、つまり標高四八二・五^{トイ}高地は、眼前にそのけわしい山りようを見せている。だが、その間に



紫金山第二峰

は三七一高地が、左の南斜面にはバラバラ松の高地、右には赤ハゲ高地が並び、幾重にも張りめぐらした鉄条網の向こうにはえんがいが壕が、その銃眼から無数の銃口が無気味に光っている。

野田連隊長は本部付きの部下を岩かげから下がらせ、自ら第二峰りよう線に立つて、敵弾なんてどこ吹く風という大胆な態度で第一線大隊を指揮し、督励している。

第一大隊（第二中隊のみ連隊予備）を手ばなし、二、三大隊も欠数多く連隊の手持ちゴマは少ない。しかも師団砲兵はまだ到着しない。馬の背のような地形で、兵力の集中ができないなど悪条件ばかりだ。『すみやかに紫金山を占領せよ』（軍司令官朝香中将宮）の重責を双肩に負う野田連隊長はじつとしておれなかったのだ。将兵は連隊長の勇姿に励まされ、そして『南京が落ちれば戦争は終わるだろう』という期待を信じて銃を握り締めた。

連隊将兵が一丸となつての戦いだ。速射砲が奮戦、通信班も十日以来大活躍だ。通信班は連隊長が青馬東方高地―上五旗（第一大隊とともに）―黄馬―紫金山頂と移動するに伴い、ガケや谷を乗り越えて線を張り、この間連隊長と第一線両大隊の連絡を完全に保った。師団通信隊から派遣された箕田准



敵の退却した壕

尉も師団と連隊の連絡任務を全うし、ともに「功績偉大ナルモノアリ」と戦闘詳報に記録されている。しかし敵も死にもの狂いに抵抗、十一日はそのまま日没となった。兵士たちは交代で山を降りて飯ごう炊さんし、あるいは敵の死体から奪った焼き米をかみ、毛布をかぶって冷たい山上で第二夜を迎えた。

◇ ◇ ◇

第六中隊の夜襲を援護した第二機関銃中隊第二小隊に軍曹で属していた津市大谷町、新山薫さんは「この戦争最後の戦闘だと、撃ちまくりました」と次のように回想している。

夜襲の行動を起こすに際し、三浦大隊長は「工兵の援護を付けようか」と辻中隊長に気遣った。だが「いりません。すべて辻大尉におまかせください」ときっぱり断わって出発して行つた。そしてすさまじい戦闘後、辻中隊長が報告にきた。大隊長と機関銃は敵弾を避けて岩かげにへばりついていた。辻大尉は「大

隊長殿、たぐさんの部下を殺して申し訳ありません」とげつそりして報告した。

新山 薫さん

翌日から第一峰攻撃に移った。紫金山の中腹まで登ってきた野田連隊長は、指揮中の新山軍曹に「ともかくこの戦争は終局だから弾薬があるだけ撃て」と命じた。「はっ」新山軍曹も部下も思わず口元をほころばせた。物量の乏しいわが軍、これまでできるだけ節約して撃ってきた。日本軍の重機は優秀で、命中率も抜群である。ために重機がうな

り出すと敵は沈黙し逃げ出すのであるが、弾のない重機は鉄棒と何ら変わらないから、残弾ばかり気にしてきたものだった。

「よし、撃ちまくれ」「やりましょう」喜んだ部下もおどるようにして猛射を開始した。一連三十発十八連詰め弾薬箱がたちまち底を見せる。銃身は焼けて真っ赤だ。水筒を振って、乏しい水で冷やす。

やがて突撃、第一線歩兵は敵と白兵戦を展開、新山軍曹も拳銃で突入した。新山さんは大東亜戦争では二十年三月召集を受け、護京部隊に入り志摩で終戦を迎えた。

(七) 山砲搬送にひと苦勞

——山頂に防楯 置き忘れる——

この戦闘では師団砲兵の到着が遅れ、地形もけわしかったため連隊手持ちの重火器がめざましい奮闘をみせたことはたびたび述べたとおり。連隊砲中隊、安田治大尉も大活躍をした。同中隊の上等兵だった井東末光さんの体験談である。

下麒麟門から青馬への道はけわしかった。連隊砲は砲二門を分解搬送し、弾薬も持てるだけ持つて青馬東北に進出、まず第三大隊に協力、次いで黄馬付近に陣地変換して第九中隊第二大隊を援護、さらに第三峰（二二七・五高地）北側あん部から紫金山南ろく付近に進出、おもに第三大隊に協力した（以上は十日の戦闘）。十一日は夜明けとともに第三峰西側付近から第一線に協力、戦闘の進行とともに紫金山東南ろくの記念館付近に陣地を進めた。

歩兵中隊はどんだん山に登っていくが、地形に制約された重火器は容易に進出できない。だが、安田砲隊長は、

「連隊砲で南京一番乗りしようぜ」

と部下を督励した。午後三時（十一日）ごろ、四一式山砲を分解、兵士たちは砲をかついで岩と岩の間をよじ登り始めた。何しろ山砲は砲身だけで百十二^キ（三十貫）余もあるやっかいなしろ物。幸い敵弾は来ないものの分解搬送の苦労はなみだいていではない。

やっと左手のあん部に進出したが、紫金山でも最も地形の低い地点だった。南京の灯は見えない。そうこうするうち日はとつぷり暮れ、やがて敵が山に火を放った（六中隊夜襲の項で詳述）パチパチと小松、杉が燃えあがってくる。流れ弾がにわかに激しくなった。パチンパチンと敵弾が松のこずえにはじくのが、

月明かりでわかる。うっかり前進できない。南京一番乗りどころか、兵士たちは心細くなってきた。

安田隊長としては付近は第九連隊（京都）が占領しているつもりだった。ところが、九連隊は日没とともに山を降りてしまったらしい。わが方は連隊砲第二小隊（西中信夫准尉）と護衛の第十中隊一個分隊だけだ。第一小隊（世古義郎少尉）は山の下で待機中だった。そこへチェコ式機銃を持った敗走中の敵兵二人がまぎれ込んできたのだ。分



井東末光さん

隊長の「金鶏（キンシ）をもらつてやる、突き殺せ」の命で十中隊の兵二人が、格闘の末殺す。うっかりしていたら、敵の大軍にぶつかるかもしれない。遠く近く敵のかん声が聞こえる。味方との連絡がとれないまま、迷い子の連隊砲中隊は中山陵の堂の中へ逃げ込んだ。堂のトビラをびったり閉めて、

「ものをいうな。音をたてるな」

と注意し合い、兵士たちはじつと肩を寄せ合った。

堂の床はタイル張りで、冷えること。砲は堂の前、コマ犬のかげに隠してあり、交代で歩哨に立つ。

チーンッ

時々、流れダマがコマ犬に当たり火花を散らす。日は落ち、あたりは真のヤミ。そのとき、ドヤドヤと音が近づいてきた。じつとヤミに目をこらすと、どうやら敵の輜重（しちょう）隊だ。堂の兵士たちは気が気でなかったが、幸い敵は気付かず通り過ぎて行つた。戦線は混戦のようすだ。



猛火に包まれた紫金山上の奮戦

待ちかねた夜が明ける。中隊は「長居は無用」とばかり砲をかつぐと中山陵の石段をどどんかけ降り、味方の位置にたどり着いた。ほっと一息ついたとき、井東上等兵は、

「あつ」と思わず叫んで飛び上がった。砲の防楯（ぼうじゅん）を山頂に置き忘れてきたのに気付いたのだ。防楯をかつぐのは井東上等兵と沢井平郎上等兵（伊賀世身）の任務だったが、なにしろ、あわてふためいていたので自分のつとめを忘れ、砲身をかつぐのを手伝ってかけ降りてきてしまったのだ（えらい、こつちや）二人は顔を見合わせた。

「どうする？」

「どうするつて、お前。取りに行かなきゃなるまい」

「えらいことになりよったのう」

意気消沈してしまった。たった二人で、敵のうようよする中へ、防楯を取りにもどるのである。井沢上等兵は、ついさつきかけ降りてきたばかりの石段を見上げた。そこだけが妙に静まり返っているような気がする。（途中でパーンと一発ぶち込まれるんじゃないだろうか）ぶるつと武者ぶるい（？）して石段を登り始めた。

（八） 今度は敵の夜襲に

——ツいていない第二小隊——

井東末光上等兵は相棒の沢井上等兵と二人で中山陵の石段を登って行く。前方を、それこそ草の葉の動

きにもかつと目をむき、じつと耳をそば立てては——小鳥のエサ拾いみたいに一歩一歩登る。幸い敵兵に会わず、やつとの思いで中山陵にたどりついた。さて帰り道、その逃げ足の早かったこと。二人は重さ三十数^キもある防楯（ぼうじゆん）をかつぐと、急な石段を飛ぶような勢いでかけ降りた。

よくまあ、あんな芸当ができたものだ、と井東さんはいまさらのようにニガ笑っている。

こうして十日夜、さんざん苦戦(?)した第二小隊に代わって、十一日はこんどは世古少尉の第一小隊が山へ登って行った。その夜、井東上等兵ら連隊砲第二小隊は、前夜一小隊のいた小屋で休むことになった。

「やれ、やれ」

「ゆうべは、えらい目に会ったのう」

「今夜は眠れるわい」



故 辻四五郎さん

昨夜、戦闘もせずにさんざん疲れた兵士たちは、大きなアクビをして背を伸ばしたものだ。

ところが、そうは問屋が卸ろさなかった。

（どうもおかしいと思つたわい）夕方まで近くにいた野砲、工兵、予備隊などは日没とともにどこかへ移動してしまつていた。そこには同小隊と護衛の第十四中隊一個分隊だけしか残っていなかった。夜はふけ、午前一時ごろだった。

「ニイ（シナ兵）だッ」

歩哨に立っていた兵が小屋に転がり込んできた。仮寝の夢を破られ、がばっと起きた兵士の耳に、

「わあーッ」

敵の喚声のはっきり聞こえた。どこまでもツイていない連隊砲第二小隊だ。小屋の外は真つ暗やミ。そのせいか、敵はかなりの数と察しられる。連隊に、その側背をおびやかされ、逆襲に出てきた第九連隊正面の敵だった（戦闘詳報による）

不意をつかれた砲隊は、歩兵と違ってあわれだ。兵士たちは手当たりしだいの武器をとって応戦を開始した。

「チェコを使えっ」

だれかが叫んだが、頼みとするぶんどり品のチェコ機銃も故障か、一発もタマを吐き出さない。第二分隊の付近に敵の手投げ弾がサク烈、大仲隊長（伊勢市出身）と太平収上等兵（亀山市出身）が戦死、また中西軍之助上等兵（一志郡美杉村太郎生出身）が太モモを射抜かれ負傷する。

この間、勇敢な兵が敵弾をぬって砲一門を前方の丘に引きずり上げた。これを見た敵は「日本の大砲をぶんどれ」とばかり殺到してきた。

「それ、行けっ」

すばやくタマを装てんした砲手は、押し寄せる敵群めがけゼロ分角で続けざまに二、三発ぶつ放した。普通、山砲は第一線のずつと後方に陣地をしき、観測班からの連絡によつて射撃する。だが、敵に接近された場合は砲身を水平に伸ばし、発射と同時に破裂するよう砲弾に装置して撃つ。唯一、最大効果のある

自衛方法だ。ごう音を響かせて飛び出した弾丸は突っ込んでくる敵群のど真ん中でバリツとサク裂、十数個の敵影が木っ葉みじんに吹っ飛んだ。これでどぎもを抜かれた敵は、クモの子を散らすように退却して行つた。

何しろとっさのことだったので、一発は山上の第一小队付近に落下、

「二小队はひどいことをしやがる」

とあとでたいへんな小言をもらつた。

「連隊砲中隊は十一日……戦闘の進展とともに紫金山東南ろく記念館付近に陣地を占領して第一線に協力せり。しかして同夜敵の夜襲を受くるもみずからよく防衛して無事なるを得たり」

連隊の戦闘詳報にこう記録されているのが、井東さんのこの体験談である。



活躍した連隊砲

第十五章 光華門攻略戦

(一) 敵の機関銃が狙撃

—— 8 発受け、4 発腹部貫通 ——

三十三連隊が紫金山攻略で苦戦しているとき、こんなに正確な砲撃がどこからされて来るのか、何故だろうと疑問を抱いていた。南京城壁へ一番に殺到した脇坂次郎大佐の率いる歩兵第三十六連隊である。

それもそのはず、紫金山の頂上より観測、そこからの指令が有線電話で連絡されていたのである。この南京攻略戦の華、光華門一番乗りの脇坂部隊には、第一大隊長伊藤善光中佐Ⅱ桑名市西別所（旧在良）三番地Ⅱはじめ五百八十余人の三重県出身者が参戦していたのである。

このことを、桑名市嘉例川一三二、伊藤保さんは、詳細に当時を懐古しながら、次のように語っていた。「私は、昭和十年の甲種合格徴兵で、久居の三十三連隊へ当然入営するものと思っておりましたところ、北陸の鯖江三十六連隊へ入営せよ」との通知が来ましたので驚いたのですが、私だけでなく同年兵が五百八十余人でして、入隊式に皆三重県出身者であることがわかり二度驚いたのでした。

鯖江は日露戦争以来勇武の誉高い連隊で、橘中佐も中隊長をされていたという伝統のある部隊ですから

訓練はきつかったです。私は第一大隊の第一中隊で、出征のときは軍旗中隊ですから非常な誇りとしていたものです。

その第一大隊長が、桑名市の出身であるということは後で知ったのです。当時の大隊長、少佐といえは神様みたいなものですから、私ら兵隊とは近づきがないし、お尋ねすることも出来なかったのです。

私たちは昭和十二年九月九日に動員が下令された。ところが、新設の歩兵第三百三十六連隊の動員編成を担当し、これを送り出した直後であるだけに、動員下令された連隊将兵の志気は軒昂たるものでした。」

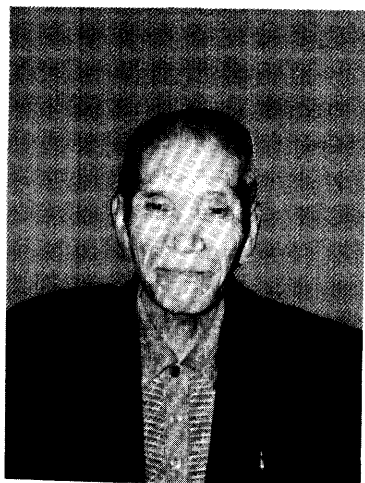
戦線加入

師団の主力は、敵の抵抗を受けることなく九月二十七日以降、呉淞鎮に上陸したが連隊はさらに回航され、江湾鎮方面のいんいんとした砲声を耳にしながら、十月一日師団に追及して予備隊となった。

このときは、上陸以来、音だけを聞いて戦争が出来なかったのも、実際に脾肉（ひにく）の嘆をかこっていたというのが実情であった。ところが、十月三日夜、命令を受け翌四日払暁から右翼隊左第一線として新木橋付近の敵陣地を攻撃することになった。

連隊は右から第三、第一大隊を第一線、伊藤さんの属する第一中隊は尖兵中隊で第一線だった。

新木橋付近の敵陣地は数線の鉄条網と掩蓋（えんがい）



伊藤 保さん

ごはんを食べる時間がありませんでしたから、腹が減っていたのでよかったです。腰骨だけ欠いて行きました。腹に巻いていた千人針が、当時のダムダム弾も四発も引き受けていてくれました。私に八発の弾が命中したのです。人間の運命というのは計り知れないものですね」

伊藤さんはこのようにして負傷し、野戦病院に入った。その間に部隊はどんどん南京へ前進して行った。「内地へ帰ったら」という話もあったが、まだ若いし、こんなことで人後に落ちることは潔しとしなかった。それで原隊復帰を希望して、上海から蘇州、常州と南京戦参加を夢みて追及した。

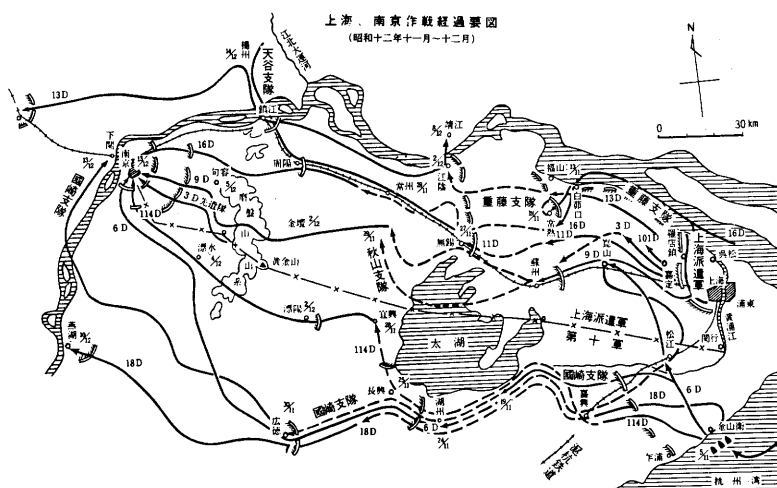
(二) 淳化鎮目指して追撃

——疲れも飢えも打ち忘れ——

師団は上陸以来、中支派遣軍の中堅として連日連夜の激戦を重ね勇戦力闘を続けていたが、堅陣蘇州河を突破して北進を続ける柳川兵团とも合流し、上海付近の敵の掃討を終え、内地からの第二次補充を受けて以後の追撃作戦を準備中であつた。

追撃の主眼は速やかに敵を捕捉（ほそく）してこれをせん滅することであつた。しかし、中央用兵当局の間においては「作戦を太湖以東に止めよ」との不拡大論と「南京に向かう追撃を強行せよ」という積極論との相克があつた。特に南京城外における戦線停止に関しては激烈な論争があり、参謀次長（参謀総長は閑院宮殿下）は南京攻略に強く反対した。正に政治的戦略の重大な岐路に立たされていたのである。

師団は、十一月十二日軍の中央追撃隊となり、西走する敗敵を追って進撃を開始した。わが連隊を基準



とする歩十八旅団は右進撃隊として黄渡鎮—崑山東方地区に向かい、歩三五を基幹とする歩六旅団は左進撃隊として黄浦—白鶴鎮を経て崑山東方地区に向かってそれぞれ追撃させ、主力は十三日出発、おおむね鉄道線路に沿う地区を安亭鎮に向かい進撃を開始した。

連隊は右進撃主力として、折からの陰雨の中、泥濘(でいねい)を冒し、破壊された橋梁を自ら修復しながら前進を続けて、十四日天福巷鎮、十五日午後には崑山に進出した。十五日夜、崑山西側の敵が退却の兆候を見せたので、師団は左進撃隊(歩六旅団)をもって直ちに追撃を再開、途中数次の抵抗を破砕しながら、十九日朝には蘇州城に突入、占領した。

連隊は師団本隊となり十九日蘇州城に進出、翌二十日未明からは再び師団追撃隊の基幹として、歩十八旅団長の指揮下で無錫に向かった。追撃途中砲兵の協力を得て、クリークを利用して抵抗する敵の堅陣を突破し、二十三日十六時三十分ごろ無錫南門に達し、強攻して二十七日

には完全に無錫城を占領した。

師団は二十八日太湖を渡って無錫西南方に進出した秋山支隊（歩六旅団長指揮のもと歩四大基幹）を引き続き常州に進出させるとともに、わが連隊を基幹とする進撃隊を曹橋鎮を経て常州に向かわせ、二十九日敵の大きい抵抗もなく常州を占領した。

三十日、引き続き歩十八旅団（歩三六基幹）を金壇城に向かい進出させていた師団は、十二月二日「南京に向かい進撃すべし」との軍命令を受領し、所在の軽微な敵を撃破しながら一日平均二十八^キ（徒歩）の速度で南京城防衛の中核である淳化鎮目指して鋭意追撃を強行した。

連隊は疲れも飢えも打ち忘れ、追撃隊の主力となつてひたすら前進を続けて、五日夜刻淳化鎮東側丘陵の敵陣前に到着した。当時、軍の補給点の推進は師団の追撃前進に追従できず、従つて糧秣（りようまつ）はほとんど現地調達に頼るばかりであった。また、弾薬の補給も極めて不十分で、蘇州河渡河のとき若干の補給を受けたに過ぎなかった。



天王寺付近で敵の破壊した橋梁を修理する工兵隊

補給用の駄馬も損耗がはなはだしく、民間の船艇、車両、自動車などあらゆる輸送機関を利用して、ころうじて第一線の追撃に追隨していた。

(三) ただ一筋に南京城へ

——敵に抵抗与えず前進——

淳化鎮付近の陣地は、南京防衛の第一陣地帯で三段に配備され、要点にはペトンのトーチカを配置し、その間を軽掩蓋（えんがい）を持つ野戦陣地で連結し、陣前には二線の屋根型鉄条網と一連の対戦車壕を構築して極めて堅固に防備されていた。

五日夕刻、敵陣前に到着した我が連隊は、第一大隊長伊藤善光少佐の報告と、連隊長自らの偵察により当面の敵陣地は極めて堅固であるが兵力は少ないと判断した。そこで第一大隊の右に山崎大尉の率いる第三大隊を展開して一挙に突破しようとしたが、敵火砲は猛烈で死傷者が続出し、六日薄暮ようやく第一線陣地を奪取した。

連隊長は直ちに第二大隊（桧皮少佐）を第三大隊の右に増加して第二線陣地に対する突撃準備陣地を構築した。この間、敵はその兵力を増加し、抵抗もますます頑強となった。わが第一線將兵は携帯口糧もすでに尽き果てて、前送されるわずかの握り飯とイモとに飢えをしのぎ、肌を刺す師走の寒風にさらされながら不眠不休で掘進作業を続けた。

八日十三時五十分、予定されたとおり砲兵は一斉に火蓋を切り、続いて友軍飛行機の淳化鎮に対する爆



軍服姿の伊藤 保さん

撃と砲兵の突撃支援射撃とともに、我が第一線は一挙に突撃を発起し敵陣内に突入した。

連隊正面においては、第二大隊が先ず突撃を発起、次いで第三、第一大隊も「われおくれじ」と手榴弾を乱投する敵に肉薄して、十四時五十分ごろには淳化鎮西端に進撃した。連隊長は血戦三日の猛攻に死傷多く、疲労こんぱいの極に達している状況にも屈せず、敵の数次にわたる逆襲を撃破しながら第二、第三両大隊に現態勢のまま断固上方鎮に向かい戦場追撃を命じた。

同時に、第一大隊に対し本道上を果敢に縦隊追撃に移行するように命じ、敵に後方陣地に拠って抵抗する暇を与えず、十六時には早くも淳化鎮西方の高管頭に進出した。連隊のこの果敢な進出につれて、師団の第一線諸隊は相前後して同夜半馬鞍山系の敵を駆逐して夜間の進撃に移った。

このころ、前面山下村西方高地にはチェコ機銃五、六挺を持つ敵約三百名が掩蓋陣地によって我が隊を猛射して来た。この状況を見た連隊長は正面攻撃は不利と判断して、第一中隊をもって本道をしゃ断し、第二、第三大隊に本道南方を迂回して上方鎮に向かい進撃するよう命じた。

十七時ごろ、戦車三両を持つ約三百名の敵が本道に沿った地区から逆襲して来たが、連隊は直ちに配属の第一独立機関銃大隊に命じて、これを攻撃、北側山地方向へ敗走させ、なお我が連隊の後方に突入しようとする戦車に対し

ては山砲の適切な射撃によって撃退した。

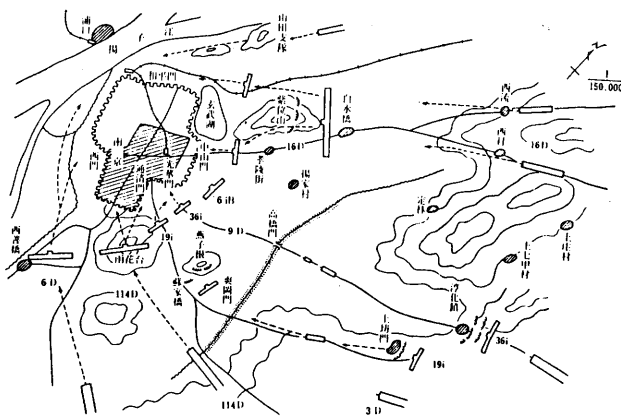
二十時、新たに約二百名の敵が第四中隊正面に逆襲して来たが、独立機関銃の支援のもとで勇戦しこれを撃退した。このころから敵の銃声が次第に減少する傾向を見せ始めたので、連隊長は寺田、大橋将校斥候を派遣して果敢な夜間追撃に移り、旅団司令部もこれに続行した。時に二十三時三十分であつた。

先に転進した第二、第三大隊の尖兵中隊である第七中隊は、上方鎮を占領して警戒に当たっていた。この時、先に突入して来た敵戦車三両が再び本道上を反転して来たので、第七中隊及び第三大隊の一部は暗夜を利用してその二両を捕獲し、更に続行するトラック一両を奪った。

このころ、山下村方向から三々五々上方鎮部落に向かい退却して来た敵が、ここを占領していた第三大隊を友軍と誤り、不用意に接近して来たので、我が将兵は不意にこれを襲い、刺殺あるいは斬殺して約八十名の敵を倒した。

連隊長は上方鎮において第三大隊を本隊に編入させ、その兵力約三百は、上方鎮―光華門道をただ一筋に南京城目指して進撃した。時に空は漆を流したように暗く、一方南

南京城攻撃部署要図



京方面には炎々とした火災が起こっているのが見えて来た。待望の南京は正に指呼の間にあり、連隊将校の志気は大いに奮った。

まっしぐらに南京に向かう我が連隊を友軍と誤り、混入して来る敵兵をあるいは刺殺し、あるいは銃殺するなど彼我混こうして文字通り平行追撃の状況となった。高橋門付近において一部の敵が抵抗を試みて来たが、我が将兵は不意に白刃を振るって一挙にこれを突破して追撃を続行した。沿道の家屋には焚火が赤々と燃え残り、所々火災を起こして敵の狼狽ぶりを思わせるものがあつた。

七甕橋（ひちおうきょう）に迫るころ、中国軍兵營の方向で盛んにラッパの音が響きわたったのは敵の非常呼集らしく、旅団司令部は七甕橋に停止、連隊は遮二無二前進を続け、ほとんど敵に抵抗のいとまを与えず、九日五時十五分ついに目指す光華門の正面クリークの線に達した。

天にそびえて見える大南京城壁を仰いで、将兵一同は不眠不休の追撃の疲労を打ち忘れ、意気天に達するかと思われた。この時、道路片側の街灯が一斉に点灯され、城壁上からは盛んに照明弾が発射され猛烈



淳化鎮付近の戦闘

な一斉射撃が起こった。

これより先、淳化鎮付近での連隊の果敢な突撃により、師団の諸隊も前後して馬鞍山から追撃に移っていたが、九日払暁には歩三五は増山門東南方陸軍兵営に、歩七は工兵学校前面に、また歩一九は我が連隊の左上方門の敵を撃退して武定門正面に進出、それぞれ当面の敵に対して攻撃を続行中であつた。

(四) 南京城砲撃を開始

——人や馬の死傷も多く——

中国軍は、鎮江——句容——溧水の線を第一線とし、南京の東方棲霞山から淳化鎮——秣稜閣——江寧鎮の線を第二線とし、更に紫金山——太平門——青竜山——雨花台——菊花台の線を主防御線とし、南京城を最後の抵抗線として総計約三十五万の大軍を各戦線に配置していた。

これに対して我が軍は第十六、第九、第四百十四、第六の各師団が数縦隊となつて南京に向かつて進撃し、九日には南京を完全に包囲する態勢を整え、航空隊は数日来南京城をはじめ、各所の敵陣地を爆撃していた。

九日十二時、松井軍司令官は南京防衛司令官唐生智に対し、二十四時間の期限を付けて降伏するよう条理を尽くして投降を勧告したがついに何等の回答も得られず、十日十



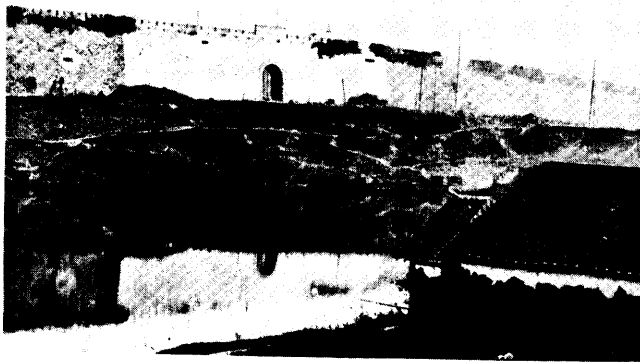
光華門攻撃の脇坂部隊長

三時から航空隊の爆撃、重砲・野・山砲、迫撃砲の全砲火を集中して一斉射撃を開始し、南京城に対する総攻撃の火蓋を切った。

南京城一番乗りの殊勲は、伝統に輝く我が連隊特に第一大隊によってなされた。

九日未明五時すぎ、光華門付近に進出すると、連隊長は直ちに第一大隊を本道北側に展開して光華門付近の敵状地形を偵察させ、第三大隊主力は山下村南方に一時集結して態勢を整えさせ、次いで到着した第二大隊を防空学校に集結させた。やがて夜明けとなるに従って、城壁上からの敵の射撃はますます烈しさを加え、後方七堯橋部落にも銃声が盛んであった。連隊長は危険を冒して防空学校東北周の望楼に進出し、副官以下と共に自ら光華門の状況を視察した。

当時の光華門は門扉を堅く閉じ、外濠は幅約百三十五メートル、水深約四メートル、城壁の高さ約十三メートル、門に通じる道路は対戦車壕、ならびに五条の拒馬をもって阻絶し、道路の両側は水際に至るまで五条の鉄条網をもって固め、城門両側並に城壁には十数個の機関銃眼を設けて教育総隊の精鋭をもって極めて堅固な守備陣を敷いていた。



光華門敵前二百メートルの壕の中で待機した

連隊長はまず配属山砲二門に破壊射撃を命じた。山砲大隊（芳賀少佐指揮）は直ちに防空学校囲壁から直接照準により破壊射撃を行い門扉の一部を破壊したが、内部には土の木材等が充満しており、その上補給の暇もなく急迫して来たので、弾薬僅少で突撃路を開設するまでには至らなかった。

そこで、小坂工兵大尉の指揮する決死隊は本道上に展開している軽装甲車と伊藤大隊の支援射撃の下に、拒馬を引き除けて肉薄し、二回にわたり爆破を敢行したが、薬量が少なく、また爆薬装填のひまがないため効果が上がらず、二十時更に薬量を増加していったが、完全な突撃路を開くことが出来ず、再び敵によって塞がれてしまった。

この間、雨花台方向からの敵の砲撃が盛んとなり、我が軍の人馬の死傷も多くなったが、我が連隊はこれを物ともせず、右第一線第一大隊は工兵の作業を支援し、光華門に対する攻撃を準備し、予備隊である第三大隊は大隊長代理西森少尉の指揮下に防空学校の西南方に対する警備を行っていた。

九日午後になると敵兵の逆襲、夜襲がさかとなり、その上に敗残兵が各方面から光華門に入ろうとして四辺に充満し、敵の銃砲火もしたがってし烈となった。更に雨花台及び紫金山両方面からする敵砲兵の集中射撃のため、我が軍の人馬の死傷も更にその数を増した。

(五) 城壁に待望の日章旗

— 將兵一同、万歳を絶叫 —

南京城の攻略

七甕橋にあった旅団司令部と連隊の間には、残存している敵の陣地及びそれに充滿している敗残兵のため、命令受領者土田軍曹が戦死し、通信兵も死傷相つぎ僅かに無線電信をもつて連絡する状態であった。十日八時ごろ、旅団副官武田大尉が山砲弾薬五百発と機関銃弾薬の補給も兼ね、軽装甲車を使用して中間の敵陣地を突破しながら連隊本部に到着、旅団長の意図を伝達した。十時ごろには通信班の決死の作業により連絡が成功し、以後は電話により細部にわたって連絡することができた。



伊藤善光大隊長

連隊長は弾薬の補充を受けた配属山砲に城内射撃を命じ、更に第一大隊にその成果を利用して十七時三十分を期し城内突入を命じた。十五時直接照準によるツルベ射ちの破壊射撃に城門上部並びに土のうが漸次崩れ落ちて急な斜坡が形成され、十七時やや前に辛うじて突撃路が開設された。

この時、敵重迫撃砲弾十数発が観測所、戦闘指揮所付近に集中したため、屋根は崩れ耳は聞こえず目は閃光にくら

み、もうもうとした砲煙に呼吸も困難となり、一時戦闘指揮も砲撃も中断の状態となった。ようやくにして砲煙が散じ「小しやくな、まだ落ちないのか」と打ち仰いだ城壁に、全軍ひとしく待望した日章旗が打ち振られ、將兵一同思わず万歳を絶叫した。

これは敵砲弾が戦闘指揮所に集中されている絶好機に乗じた伊藤少佐の独断突入の命令に、果敢な突撃を発起した山際中尉の率いる第一中隊、更にこれに続く葛野中尉指揮の第四中隊の勇士達の一番乗りの日の丸であつた。

しかしながら、戦況はますます悲惨となり、死傷続出といった有様であつたが、我が將兵の士気はいささかもひるまず極めて旺盛であつた。

連隊長は直ちに次の要旨命令を下達した。即ち「伊藤大隊は全滅を期して光華門を確保すべし」と。

悲壮な決意をした伊藤少佐は、薄暮を利用して予備隊である第三中隊を率いて城門前に前進したが、城門からの機関銃の縦射、城壁上から投げ下ろす手榴弾の雨に戦況はいよいよ困難を極めた。

この間において、大隊長伊藤善光少佐は沈着剛胆、部下を



光華門に挙げられた日ノ丸（中央）

激励して士氣少しも衰えず奮戦力闘「鬼神をも泣かしむ」という壮烈な戦い振りであった。有名なのは、光華門突撃路において部下の負傷者を小脇に抱えての、突撃前の人員点呼である。それは血だるまになっている負傷兵を小脇にかかえ右手に血刀をかざして力強い応答である。かく弾丸正に雨飛の中に於て毅然として立つ伊藤少佐は桑名市西別所三二番地の出身で遺児は健在である。この行動は何人もよく行い得ない沈着勇猛な行爲である。その伊藤少佐は去る昭和七年の第一次上海事変に於て負傷した際、御下賜賜りたるものであったがため「伊藤大隊は全滅を期して光華門を確保すべし」の命を受けるや、この恩賜の義眼を傷けもし紛失することがあつてはならじと連隊長に後事を託して光華門へ駆けつけていたのである。が、城壁の上から投下して来た手榴弾は少佐の右額部を破さいした。二十一時ごろ城内確保を叫びながらついに壮烈な戦死を遂げた。

以後、城内の將兵は大隊長の遺命を厳守し、土のう、石塊、木材が崩れ落ちてできた内斜面に三段の掩体を作り、あくまで死守し続けた。第一大隊竹川中尉は部下中隊及び機関銃中隊を指揮して敵の逆襲を破碎しながら、一部を門内に突撃支援させ、自ら各中隊の兵を統一指揮して同地の拠点を確認した。

(六)

手榴弾で敵が逆襲

——大半死傷、後続もなく涙——

二十四時ごろ、敵は催涙ガスを投下し、また戦車一両をもつて前後数回にわたり至近距離内に肉薄して門内を猛射し、また、一時ごろには城門上から材木を投下してこれに石油を注ぎ火を放って、終夜焰々た

る火勢をあげて我が将兵を苦しめた。我が守兵はよくこれに耐え光華門は依然我が手を離れなかった。

十一日、重砲大隊及び独立機関銃中隊は飛行場付近で陣地を占領して我が連隊に協力することになり、十二日未明より正確な城壁破壊射撃を開始したため、さしもの城壁も次第に崩れ、九時三十分友軍飛行機の爆弾と相まって敵を圧倒した。

この好機に乗じた小銃分隊（軽機二、重機一）は光華門内より城門上によじ登り、一旦これを占領したが、我が砲爆撃の中止と同時に、敵も大挙逆襲してきて、迎え討つ我が軍は忽ち弾薬尽き白刃を振るって応戦した。しかし敵は手榴弾を投げながら遠巻きに猛射して来たため、我が兵の大半が死傷し、城壁にかけた梯子も敵の手榴弾のため折られて後続なく、再び門内に涙を呑んだのである。

光華門の死守三日間

もう十一時になっていた。ここ光華門内は確守死守の



光華門突入

土壇場だった。

むせぶような、ほえるような、わめくような、弾、人、死がのたうっていた。敵の照明が時々、その形相をさらけ出してみせた。

兵隊たちは、無限の力と無量の頼もしさを覚え、重苦しい空気を勇気でつき破って、撃鉄を固く強く握るのであった。

「山際少尉殿！佐藤一等兵の苦しげな声だ。佐藤か！」「山際少尉殿！左足をやられました」「そうか！しっかりとしろよ」「は、はい」佐藤のそばにいた奥村衛生兵の声がした。

「佐藤！巻脚半をほどいて止血しろよ、もう包帯はなくなってしまったからなあ。おれも両腕を深くやられたので、縛ってやるのが出来んだ」倒れてなお、任務を忘れない奥村の声だ。奥村は続けて他の負傷兵にも聞こえよと、声を絞って叫んだ。「おーいみんな、弾丸や、破片が創口にはいつてもそれを抜きとつてはいかんぞ！傷口が凝り着いているのを剥ぎ取つてはいかんぞ！包帯は各自の巻脚半で、間に合わせろ、止血を忘れるなよ」傷つくもの、倒れるものは、時間と共に殖えてゆく。しかしただ死守あるのみ。

兵士たちの傍には、既に昇天した戦友の骸（むくろ）が、幾つも積み重ねられていた。ごうごうたる音響の底には、深い死の眠りが漂っている。

負傷した兵が、そっちでも、こっちでもうめいている。

「うめいては駄目だ。苦しかろうが、我慢してくれ」山際少尉が断続する幾多のうめきに向かって、痛々

しく叫んだ。

うめき声はぴたと止んだ。山際少尉は闇に手を合わせた。突如、だれかがわめくように叫んだ。「ガスだ！ガスだ！」「脇坂部隊」より。この小説は、当時の光華門死守の様相をもっとも事実に近い表現をもって綴られているので取り上げた。

(七) 城内の敵を猛射

——困苦欠乏に耐えた将兵——

十四時三十分、連隊長は城内外第一大隊の残部をもって、竹川集成中隊を編成し、第二大隊長桧皮少佐に命じてこれを併せ指揮させた。そこで桧皮少佐は第七中隊をもつて先ず集成中隊を増援、更に弾薬食糧の補給を試みたが、その通路を縦射され前進する者皆倒れ傷つき、ついに成功しなかった。だが、城内の将兵はよく困苦欠乏に耐え、死力を尽くして一歩も譲らず城門内を確保していた。

十六時、急斜坂の突撃路が遂に開設された。協力重砲部隊



戦いすんで堂々の入場を行う
脇坂部隊の兵隊たち

臭気のある空気が流れている。(中山正男作)

はこの間、城内の敵を猛射しその威力は敵勢を圧倒した。その好機を利用して第二大隊は門内へ彈藥食糧の補給を行うことに成功し、門内の將兵の士氣が大いに奮った。

夜半ごろより敵の銃声、手榴弾投てきが次第に減少してきたが、十三日四時、全くその音が聞こえなくな

った。偵察の結果、

敵の大部隊は既に退

却していることが判

明したので、竹川集

成中隊は城門内ア

チの右側破壊斜面か

ら一挙に城壁上に躍

り上がり、城壁上を

掃討、確保した。

上海に上陸して以

来約三カ月、奮戦力

闘を重ねてついに敵

首都占領、一番乗り

の栄誉は燦(さん)

④ 光華門上における「涙の万歳」

⑤ 光華門上の伊藤部隊



として我が軍旗に輝き、日露戦争以来の輝かしい歴史に新しく大きな一頁を加えることになった。

こうして連隊は翌十三年二月十一日、軍司令官朝香宮中將から感状を授与され、また先頭を切つて光華門に突入した山際少尉は宮殿下から軍刀を賜わる榮に浴した。

この戦闘において連隊の損失は戦死伊藤善光少佐以下二百七十五名、負傷小川清大尉以下五百四十六名であつた。

脇坂連隊長は光華門占領直後、次の漢詩及び和歌を作つて亡き戦友の靈を慰めるとともに自らの感懷を述べた。

力攻占拠光華門　南京城壘為之陷　曉雲忽散旭旗翻　感激皇恩揮東天

亡くなりし兵たちに榮あれと

勝利のかげに　祈る悲しみ

師団内各方面とも十日南京城直接防衛の陣地に對し猛攻を繰り返したが、戦況は思うように進展せず、十二日夜半以來ようやく敵退却の兆に合せて突撃を敢行、右翼隊は十三日六時中山門を占領した。この間、連隊將兵の軍紀は至つて厳正で、激戦数昼夜にわたつた後の入城であつたにもかかわらず、寸毫も犯すところがなかつた。

第十六章 紫金山第一峰攻略

(一) 攻略作戦決まる

——「いくぞ」の号令で突撃——

南京城に、右第一線から十三師団の重藤支隊、京都十六師団、名古屋三師団先遣隊、金沢九師団、久留米百十四師団、熊本六師団が殺到した。

金沢の九師団は、その先鋒が鯖江の三十六連隊、その第一線の第一大隊に郷土の伊藤大隊長以下五百八十余人の勇士が八面六びの大奮戦をしている。

敦賀の十九連隊は通済門に肉薄中。中華門には柳川中将の率いる第十軍団、音に聞こえた久留米の百十四師団、さらに当時泣く子も黙ると恐れられた第六師団が水西門、漢西門に迫っている。莫愁湖に水煙の立ち登るのが見えるようである。

揚子江には、海軍の遡江部隊が威風堂々江を圧していた。対岸の揚子江浦は台湾部隊が既に占領、敵の首都を完全に包囲した。今後の交戦は百害あって一利なし。しかし、「江寧の地は中国の旧都にして民国の首都なりとし、華麗なる古都を戦火にさらし、民衆を塗炭の苦しみへ追うは忍びず」とした投降勧告に返

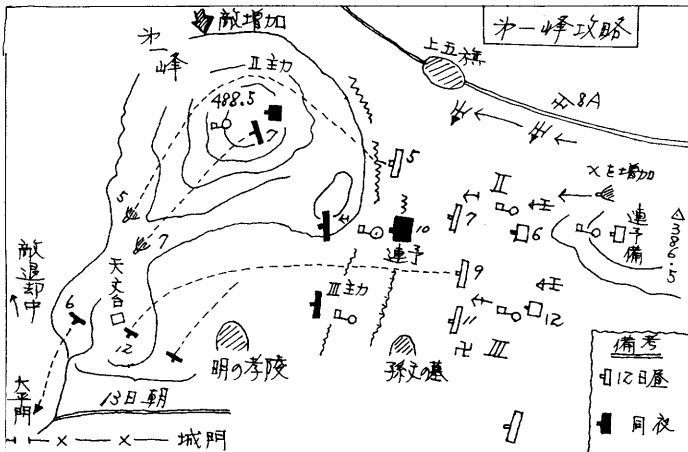
って来た答えは猛砲火の反撃であつた。事これまでと応じた日本軍の攻撃は、勇猛果敢にして鬼神も泣かんとするものである。そして我こそは南京城一番乗りを、我中隊こそ、我連隊こそ、我師団こそと功を競つて争う軍の偉容は精鋭という言葉が通ずるのであつた。

光華門を猛攻するのは我郷土部隊。中華門、通済門、水西、漢西、それぞれ花々しい戦果が進捗している。その大南京城の咽喉を扼し、睥睨する一大要衝、紫金山を攻略しようとする部隊こそ南京戦の華の華。その重任こそ我三十三連隊、神々のふるさとをもつて誇りとする郷土部隊である。

その責は重く、かつ大であつた。全軍の将兵、一卒に至るまで、その責任感に奮然として使命感に燃えた。

勇猛果敢な神の使徒、権化をもつて任ずる姿は、その攻撃振りに現出されていた。

第三峰、第二峰と完全占領し、今その主峰である第一峰に挑戦。これを攻撃奪取しようと前進するのは三浦少佐の率いる第二大隊の精鋭である。



第一峰攻略の作戦地図

時は十二月十二日午前二時、月はすでに山の端に沈み、紫金山頂は深いヤミに包まれている。とある岩かげで、時々チカチカと赤い火がまたたく。連隊長命令に基づき、きょうの第一峰攻略の作戦をねる第二大隊本部であった。大隊長三浦俊雄少佐を中心に、各中隊長がひたいを寄せ合い、真剣なまなこで地図を追っている。

師団の企図は、同日朝から砲兵を総動員して敵陣をくずし、第一線歩兵の突撃を開始、第一峰を占領する。以後、農林場を経て遺族学校高地にわたる敵陣を攻略、南京城に突入するというもので、右翼隊の十三連隊は依然前任務を続行すべしであった。

このため野田連隊長は、十二日午前零時四十五分「歩三三作命甲第一三一号」を出し、依然攻撃を続行すべしと次のような命令を下した。

第二大隊（8、7の一小隊欠工兵一個小隊配属）は攻撃を続け第一峰を攻略、次いで天文台北部高地を抜いて大平門に進出、とくに北方からの敵を警戒すること。第三大隊（10欠）は前面の陣地を奪取したあと第一峰南ろく高地から明孝陵北端付近にわたる陣地、さらに天文台南部高地の敵をくだいて富貴山に進出する。

第一線両大隊の戦闘地境は、第一峰東側閉鎖曲線高地の南ろく、第一峰南東小閉鎖曲線、天文台につらなる線とし、第一線は砲兵の射撃効果を利用して攻撃前進する。その時期は別に命じる。連隊砲および速射砲中隊は現陣地において両第一線大隊とくに右大隊に協力し、配属砲兵第八中隊は上五旗付近に陣地をしいて第一峰高地の敵陣を射撃、右第一線大隊の攻撃に協力せよというものであった。

この命令に基づき第二大隊長は左第一線に第七中隊の第二小隊（田中操曹長、上野市服部町、故人）右第一線に第五中隊（脇岡直大尉）いづれも機関銃一個小隊配属を配置して第六中隊（辻四五郎大尉）第七中隊第一小隊（川戸正巳准尉）工兵小隊（永峰広信少尉）を予備とした。こうして第一峰攻略の作戦は決まった。本部に集まっていた各中隊長は間もなくヤミの中に散った。本部も火を消した。第一線の壕の中では、兵士たちはある者は妻子に遺書をしたため、ある者はお国自慢を口ずさみながら、数時間後に迫った突撃に備えた。

午前六時半、あたりがしらみはじめ、第一峰の敵陣をおおっていた霧もようやく晴れようとしていた。第一線はすでに攻撃隊形に展開、土のうを積んで防備した速射砲中隊も敵銃眼をにらんでいる。敵は第五中隊正面の赤ハゲ高地と第七中隊第二小隊正面の三七一・〇高地に迫撃砲、重機を持った有力な部隊がトーチカ、散兵壕に陣取り、この前方には高さ一・二メートルの屋根形鉄条網を張りめぐらしていた。

大隊長は攻撃の重点を第五中隊正面に置き、攻撃前進を命じた。早くも部隊の行動を発見した赤ハゲ高地の敵は、天文台の重砲陣地に連絡し、砲弾の雨を降らせてきた。同時に両第一線正面の敵重機、チェコ機関銃も一斉射撃を始めた。「何をこしゃくな」とわが第二機関銃中隊（島田勝巳大尉）も応戦の火ぶたを切った。時に午前七時、あたりはすっかり明け切り、岩石のいるいと重なるりよう線、赤ちゃけた山ハダがはつきり見えるようになった。「行くぞ」中隊長の号令で、第一線歩兵は壕を飛び出す。たちまち敵弾が凍った壕の土をパチツとはねあげる。プツツという音は、土のうにかみつくタマの音だ。

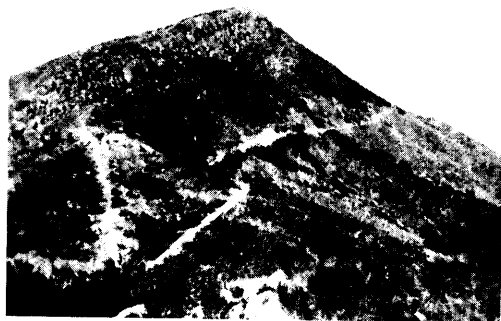
(二) 意を決して敵陣へ

——煙幕張り銃剣かざして——

右第一線の第五中隊は、重機の援護射撃を受けながら正面赤ハゲ高地の敵陣めざし前進を開始した。紫金山攻略は好天に始まり、きょうも雲一つなく晴れ上がっている。中隊長（大尉）だった肱岡（ひじおか）直さんは鹿児島県出水郡野田村上名出身、戦後、陸上自衛隊明野航空学校副校長、第十五普通科連隊長（善通寺）など歴任した人だ。同中隊は前日、第六中隊と代わって第一線に出て、そのままきょうは大隊の第一線主力部隊として第一峰の攻略である。

第二峰から第一峰に続くりょう線上は、馬の背のように狭くけわしい地形だ。左（南面）は斜面だが、敵砲火に制せられて前進はきわめて困難、右（北面）は数十メートルの断ガイだ。しかもりょう線上はそいだような岩角がえんえんと続く。中隊はまず一列縦隊となつて、前進した。

このころ左の第七中隊田中小隊も五中隊に呼応して三七一・〇高地の敵攻撃を開始していた。同八時二十分から射撃を開始した速射砲はたちまち敵トーチカの銃眼を制圧していく。何しろ厚さ

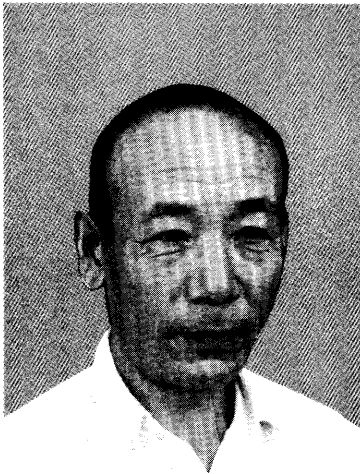


紫金山の最高峰

七十^才もあるベトン制トーチカだ。小銃では歯が立たない。師団の野砲兵第三大隊が援護射撃をしてくれる手はずだが、地形が悪く観測も困難でその威力が期待できない。このため大隊長は配属の砲兵第八中隊、手持ちの大隊砲、機関銃を督励しフルに動かす以外になかった。

午前九時ごろ、第五中隊は一気に赤ハゲ高地を奪取すべく肉薄、敵前百^{メートル}まで迫ったが、高地上から浴びせてくる敵の集中射撃でクギ付けとなってしまった。間もなく大隊本部から発煙筒が供給された。肱岡中隊長は第一小隊（奥野安次少尉）第二小隊（永岡了少尉、名張市国津出身）両第一線小隊に配り、煙幕攻撃を命じる、たちまち赤ハゲ高地はもうもうと吹き出す白煙に包まれた。「突っ込めッ」両小隊は銃剣をき

らつかせ、鉄条網を踏み越え敵散兵壕へおどり込む。敵陣は大混乱、多数の死体を残して退却していった。第五中隊が赤ハゲ高地を占領すると、敵は三七一・〇高地と北方りょう線から激しい十字砲火を浴びせ



故 小竹十九八さん

てきた。同中隊は一部を確保に残し、主力は三七一・〇高地に向け攻撃前進を続けた。地形を考慮した肱岡中隊長は予備隊だった第三小隊の二個分隊に命じた。中隊指揮班長の小竹十九八准尉（津市）が指揮し、山田則夫軽機分隊長（志摩郡和具出身）渥美重雄分隊長（安芸郡安濃町出身）が続く。同高地左面から岩かどや草の根に手をかけ、突角部によじ登る。小竹准尉は松の木にバンドでからだを結びつけ安定をはかって攻撃を命じた。第一射手、佐野滝太郎

一等兵（鈴鹿郡出身）がわずかな平地を探して軽機をすえたが、とたんに胸を貫通され戦死、代わった射手も負傷し、山田分隊長も頭を撃ち抜かれ戦死する。小竹准尉はすぐ横の松林に移動を命じた。

脇岡中隊長は敵情がわからないので兵を山かげにかくして自らりょう線上に登った。双眼鏡を取り出し敵情を探っていると、小竹准尉がそばへ来て立った。突然、敵はすぐ近くの地点から数発のソ撃弾を発射した。「小竹あぶないっ、下れッ」とどなつて、自分も立った瞬間、左胸を貫通されのけぞった。介抱にかけ寄つた富田実衛生兵（鈴鹿郡出身）も戦死、同中隊を援護していた機関銃中隊の三輪英雄少尉（三重郡出身）も戦死した。

脇岡さんは昭和三年から三十三連隊に所属（士官候補生）十四年三月大阪幼年学校生徒監で転出するまで同連隊にいた。以後は第四飛行団司令部、十九年二月飛行第八戦隊長（軽爆）でビルマで終戦。



敵の鉄条網を逆利用する

(三)

重機うなり敵倒す

——次々と主要陣地を奪取——

中隊長を失った小竹十九八准尉はしやにむに軽機を撃った。そのうちタマが尽き、小銃弾をつめて撃つ。この状況を見た三浦大隊長は三七一・〇高地つまり田中小隊（七中隊）の正面から攻撃を進めることに決め予備に置いていた第七中隊（川戸正巳准尉、亀山市、故人）に「左第一線の田中小隊を指揮下に入れ、二個小隊をもって同高地正面から攻撃前進すべし」と命じた。

川戸准尉は田中第二小隊をそのまま左一線とし、右第一線に第一小隊（古市次郎軍曹、松阪市松江出身、大別山で戦死）を配し、岩のごろごろする斜面をはい上がり、まず鉄条網を破壊する。三七一・〇高地は



軍服姿の間柄 馨さん

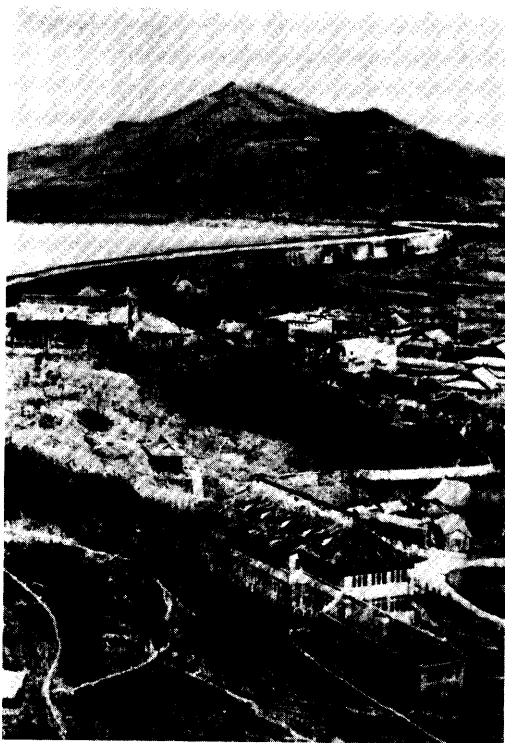
第一峰正面にあり、第一、第二線と陣地を二陣に構えている。速射砲が「すみやかに正面えんがい陣地を撲滅されたし」との三浦大隊長の要請にこたえ、銃眼めざし正確な射撃を開始、大隊砲も集中砲火を浴びせる。これで敵の抵抗はかなり弱まった。

川戸准尉はてき弾筒に射撃を命じ、その援護のもと兵力を敵前五十メートルに進めた。敵はあわてて手投げ弾を投げつけてきたが味方の線までは届かない。川戸准尉はラッパ手に

突撃ラッパを吹かせ、兵に「わあーッ」と大喚声をあげさせた。驚いた敵はありったけの手投げ弾をぶつけてきた。敵が投げ尽くしたと見た川戸准尉は、すかさず「突っ込めーッ」軍刀を振りかざす。こんどはほんとうの突撃だ。兵士たちは岩かげからおどり出て敵軍になぐり込む。抵抗の意欲を失った敵兵はわれ先に左斜面をころげ降りて行く。待ってましたとこれを重機がなぎ倒す。七中隊はこの勢いで第二線陣地も突破、突角部にあった五中隊の市川小隊も同時に突入（後述）同高地を占領し確保した。

一方、左第一線の第三大隊も第一峰南ろくのバラバラ松高地の敵陣と相対し苦戦していた。敵前わずか二百メートル、チェコ機銃のものすごい火線

にはばまれ、松林に散開したままクギ付け状態だった。第九中隊第一小隊長、間柄馨少尉（松阪市山室）が負傷、機関銃小隊長、乙部一准尉（津市栗真町屋町）が陣地変換の連絡中、胸に二発受けて戦死した。午後一時ごろ、第九中隊はバラバラ松に突入、数回にわたって白兵戦を展開し占領した。第三機関銃中隊長、菅野浄大尉、九中隊長、井原義澄中尉、駒谷一郎准尉（松阪市）



紫金山第一峰の遠望